



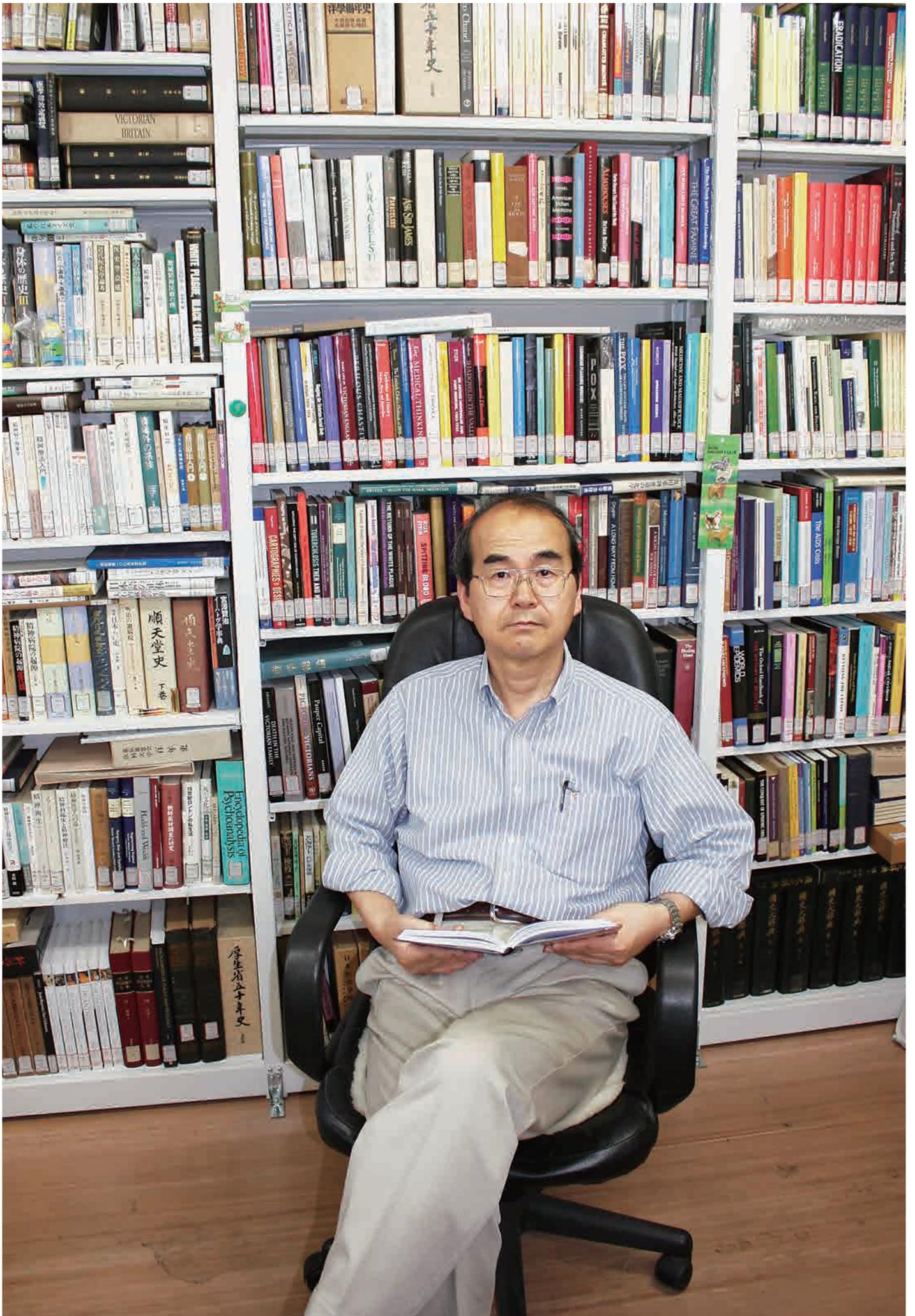
名古屋大学大学院 国際言語文化研究科

Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

日本言語文化専攻

国際多元文化専攻





研究科長からの メッセージ

福田真人 教授

様々な言語と文化の交錯する場所へようこそ！

国際言語文化研究科は、グローバル化の時代にあって、学際的研究に対応しつつ人文学・社会科学領域で世界の言語と文化を研究、教育する機関です。名古屋大学、中部東海地区のみならず、日本、そして世界の中で独自の位置を確保しています。

当研究科は、日本言語文化専攻と国際多元文化専攻の二専攻を有しています。国際多元文化専攻にはメディアプロフェSSIONALコースと英語高度専門職業人コースも設置されています。当研究科はさらに、海外からの留学生向けの、すべて英語で授業、研究を行う「グローバル 30 プログラム (G-30)」の比較言語文化コースを擁しています。

日本言語文化専攻は、将来、日本語および日本文化を教育・研究する希望をもった外国からの留学生を定員の半分以上にするという条件で始まり、日本語および日本文化教師の養成機関として、有能な人材を輩出しています。国際多元専攻では、多様な外国語および地域文化研究を推し進め、近年とりわけ注目を浴びるようになったジェンダー研究（ジェンダー論講座）、メディア研究（メディアプロフェSSIONALコース）でも目覚ましい成果を上げています。また、英語高度専門職業人コースでは、中高等教育の場、実業の場で英語を使用して活躍する教員・実業人などの教育に力を入れて、実績を上げています。

G-30 コースは、英語だけで講義を行い、英語で論文を執筆するという世界に開かれたコースで、日本文化／日本語学を学ぶために多くの国から、多様な興味、研究テーマを持った学生が集まっています。

私たち国際言語文化研究科は、不安定で不確実な世界情勢・社会の中で、グローバルに活躍する人材の育成に向けて、語学力、文化理解力ならびに発信力を強化するプログラムを提供できると自負しています。

みなさんの若々しい知性と情熱を当研究科の渦の中に投げ込み、響き合う音に耳を傾け、湧き上がるうねりに身を委ねてみて下さい。きっとそこに新しい文化の響きと輝きを見いだすに違いありません。

Contents

研究科長からのメッセージ	1
日本言語文化専攻 日本語文化学	3
比較日本文化学	5
日本語教育学	7
応用言語学	9
現代日本語学	11
日本語教育方法論	13
国際多元文化専攻 多元文化論	15
先端文化論	17
アメリカ言語文化	19
東アジア言語文化	21
ヨーロッパ言語文化	23
ジェンダー論	25
メディアプロフェSSIONALコース	27
英語高度専門職業人コース	29
Graduate Program in Comparative Studies of Language and Culture (G30)	31
修士論文題目・博士論文題目の一部	33

日本語文化学

Japanese Language and Cultural Studies

日本の歴史と社会を言語と文化の両面から学び、日本研究に資する人材を育成することを目的とした講座である。文学から、思想史、比較文化まで幅広い研究領域を視野に入れつつ、個別のテーマを深く分析、考察することを目指している。比較文学・比較文化と言っても、比較の視点はどこにでもあり、日本文化の一テーマを深く追究することも可能である。これまで提出された論文のテーマは、多岐にわたる。例を挙げると、武士道研究、日本の木版画の影響を受けたオーストラリア人の芸術活動についての研究、スウェーデンにおける俳句受容と俳句がスウェーデン詩に与えた影響についての研究、近代日本における愛玩犬の扱われ方についての研究、日本における総角結びについての研究、などである。つまり、日本を基軸に据えれば、ほとんどあらゆる種類の研究が可能であるという点で、幅広い可能性を秘めた領域、講座であると言える。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/nichigen/>

教員と専門領域・研究テーマ

福田真人 教授

比較文学比較文化、医学史、19世紀明治日本とヴィクトリア朝英国の文化的比較。主に病気、医学の文化史的研究で、特に結核、性感染症としての梅毒の文化史的研究をしている。それに付随して治療法としての温泉療法、水療法から、水の文化史にまで領域は拡大している。風呂、上下水道、トイレなども研究の範囲に入っている。医学の歴史（医学史）も興味範囲に入っているが、医学者の伝記的研究も視野に入っている。病気や医学が文学にどのように反映されているかの研究は、まさに比較文学のテーマになる。近代化過程の検証という意味で、日英比較が意味を持っているだろう。

授業は「日本語文化学方法論」を担当。春学期には文化的研究を、秋学期には比較文学的研究の演習をしている。2010年度前期は病気の文化史的研究、後期は文学に表われた母親像。2011年度前期は水の文化史的研究、後期は猫の比較文学的研究。2012年度は「米欧回覧実記」研究。

涌井隆 教授

研究テーマは、日本の近代・現代詩、とくに星と近代文学です。中西悟堂について調べています。最近、明治時代の日本の詩人を英語に訳すプロジェクトに参加して、島崎藤村や蒲原有明の作品を英訳しました。詩や現代芸術への関心から、アニメーションにも興味を持つようになり、2011年からG30のプログラムに参加して世界のアニメーションについて講義しています。短篇アニメーションは比較的短い表現形式として詩と類似しています。授業は、「言語文化交流論」を担当しています。春学期には異文化交流についての基本図書を読みます。日本を正しく理解するためには、日本が置かれた世界を正しく理解することが不可欠です。ネットも大いに活用して皆で読み、議論します。秋学期には、外国語の詩（主に英語と中国語）を日本語に訳す練習を行います。米国インディアナ大学比較文学科で修士号、米国コロンビア大学東アジア科で博士号取得。

個人HP <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~wakui/>

◎医学の文化史的研究！

『結核の文化史』（名大出版会）、『結核という文化』（中公新書）、『日本梅毒史の研究』（思文閣出版）、『北里柴三郎』（ミネルヴァ）、『病院と病気』（ゆまに書房）、『医学の歴史』（翻訳監修、原書房）、Public Health and the Modern State(Rodopi) などなど。



◎国際シンポジウム

「異文化としての日本」

2008年11月に本専攻科で行われたシンポジウム。日本語や日本文化を異文化の視点から再考し、「日本学」の新たな意義を探索することを目的として開催された。





福沢諭吉『西洋事情』を分析する授業：日本人、ウズベキスタン人、中国人が受講しました。

修了生紹介



マッシミリアーノ・トマシ 教授

イタリア・フィレンツェ大学出身。1997年3月に「明治・大正時代における日本の修辞学研究」という論文で博士号(文学)取得
現在ウェスタン・ワシントン大学教授

It has been sixteen years since I graduated from Nichigenbun.

I am now Professor of Japanese and Director of the Center for East Asian Studies at Western Washington University. My publications include two books, *Rhetoric in Modern Japan: Western Influences on the Development of Narrative and Oratorical Style* (U of Hawaii P, 2004) and *The Literary Theory of Shimamura Hoogetsu (1871-1918) and the Development of Feminist Discourse in Modern Japan* (Mellen, 2008). I am currently working on a third book project titled *Metaphors of Christianity: Love, Sin, and the Dilemma of Faith in Modern Japanese Literature*. The eight years I spent at Nagoya University were extremely important for my formation as a teacher, a scholar and an individual. I have wonderful memories of my academic experience at Nichigenbun and constantly look forward to my next visit. (Massimiliano Tomasi)

比較日本文化学

Comparative Culture

比較日本文化学講座は、日本文化を異文化と比較対照しながら研究する講座です。留学生が多い講座ですので、学生たちは自文化と日本文化の間に立って、さまざまに思い悩みながら、自分の目指す研究の焦点を絞っていくことが多いように見えます。日本人の学生の場合には、日本文化の異文化受容に関心が注がれます。わたしたちは、日常的なさまざまな場面で、異文化間の接触・融合・反発などを体験し、見聞していますが、そのような日常的体験は深く分析されないままに、次々と目の前を通り過ぎ、また新たな体験によって上書きされていくのが普通です。文化の比較研究というのは、通り過ぎていく、これまで通り過ぎていった多様な事象を前にして、ふと立ち止まり、目を据え、ある一つの事象を選び取って見つめ、あるいはいくつかの事象の関連を問う、そのようにして始まる学問だと思います。わたしたちの講座は、日本文化と異文化とが関わる一つの場面に強く惹きつけられたことがある、そんな体験をもつ向学心旺盛な人ならば、誰にでも開かれています。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/hikaku/>

教員と専門領域・研究テーマ

前野みち子 教授

専門領域：比較文化史

近年の研究：恋愛と結婚の文化史、明治期日本の西欧文化受容と漢文脈

指導可能領域：近代日本文化史、近代西欧文化受容史、女子教育史

胡潔 教授

専門領域：平安文学、比較家族史

近年の研究：律令の導入と家族制度の研究、平安文学と中国文学の比較研究

指導可能領域：古典文学の比較研究、中国文化受容史、比較家族史

浮葉正親 教授

専門領域：文化人類学、民俗学

近年の研究：韓国における巫俗文化の現在、戦後日本社会と在日朝鮮人文学

指導可能領域：在日朝鮮人文学

渡辺美樹 准教授

専門領域：児童文学、英文学

近年の研究：ファンタジー

指導可能領域：児童文学・文化

国宝『源氏物語』絵巻東屋一

侍女に髪を梳かせる白装束の中君、美しい顔を見せて絵草子に見入る浮き舟。吹抜屋台、引目鉤鼻などの技法が用いられており、平安時代の貴族の物語享受のあり方を知る上で貴重な資料である。



歌舞伎舞台

(犬山市明治村、呉服座) 重要文化財

旧所在地：大阪池田市西本町

建設年代：明治25年(1892年)

当時歌舞伎だけではなく、尾崎行雄や幸徳秋水らが立憲政治や社会主義の演説会に使っていたことが特に興味深い。



東京名所新橋ステーション蒸気車之図 (1875年頃の錦絵)

開化を告げる文明の利器と洋装の人々。カイゼル髭の外国人紳士。この図は、東アジアの近代を考えるための糸口を示唆している。





前野みち子 教授

比較文化研究の面白さを体験しましょう!

比較文化研究の面白さを是非皆さんに実感して頂きたいと思います。資料の読み方、問題の捉え方、論の構成の仕方、記述の仕方などを一つ一つしっかり学びながら、自分自身のオリジナルな研究世界を構築していきましょう。

胡 潔 教授

答えは皆さん自身の努力で見つけましょう。

「文化研究」とは何か。答えるのが簡単のようで、難しい。「文化」は「時」と「場」によって異なり、境界線を持っています。また文化は「時」と「場」を越えて他の文化と融合する特性も持っています。このような文化の地域性と普遍性を見極める確かな「眼」を、学習を通して、学友との切磋琢磨を通して養いましょう。

浮葉正親 教授

自分の目を見たこと、体で感じたことを大切にしましょう。

「文化」とはある集団が世代を越えて伝えていく癖(くせ)のようなものだと思います。赤ん坊がいつの間にか言葉を覚えるように「文化」は無意識のうちに伝えられます。他者との出会いは、そんな「文化」の壁を気づかせてくれる機会です。自分にとって「異」なるもの、彼らの声やしぐさに注意をしましょう。新しい自分と出会うために。

渡辺美樹 准教授

新しい地平を目指して頑張りましょう。

人間が作り出した世界の全てを文化とすることができるので、世界の広い範囲に適用できるような答え方を思索しましょう。とはいえ、準拠枠を明確にして分析対象を絞り込む必要はあります。第一歩はとにかく無駄足になりやすいのですが、時を経てその無駄足が結実した後ようやく文化研究が始まるのかもしれない。

日本語教育学

Teaching Japanese as a Foreign Language

日本語教育学講座は、科学的思考・実証的方法論に立脚して言語教育に関わることでできる研究者を養成します。学生には、高度な研究能力と教育能力の双方を備え、修了後には言語教育の第一線で活躍することを期待します。そのために、心理言語学、第二言語習得論、日本語教育学、統語論等を専門とする教員が一丸となって指導します。

【修了生の主な就職先】

(日本)北海道大学、東北大学、東京学芸大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学、早稲田大学、麗澤大学、桜美林大学、東邦学園大学、名古屋学院大学、南山大学、関西大学、立命館大学、国際交流基金、(韓国)慶尚大学、建国大学、(中国)天津外国語大学、華東政法大學、西南交通大學、吉林華僑外國語學院、通化師範大學、(台湾)政治大學、台中科技大學、東吳大學、銘傳大學、中華大學、靜宜大學、大葉大學、明道大學、吳鳳技術學院、(ベトナム)ベトナム貿易大學、(マレーシア)マラヤ大學、(タイ)タイ国政開発機関、(トルコ)チャナッカレ大學

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/0-kyouiku/>

教員と専門領域・研究テーマ

玉岡賀津雄 教授

(TAMAOKA, Katsuo) Ph.D.

研究テーマ：心理言語学、言語習得、言語の認知処理
担当授業：日本語教育学原論

杉村 泰 准教授

(SUGIMURA, Yasushi) 学術博士

研究テーマ：日本語教育、現代日本語学（教育文法）
担当授業：対照表現論演習Ⅱ

鷺見幸美 准教授

(SUMI, Yukimi) 学術博士

研究テーマ：日本語教育、現代日本語学（意味論）
担当授業：対照表現論演習Ⅰ、日本語教授法及び実習、日本語教授法概論

稲垣俊史 准教授

(INAGAKI, Shunji) Ph.D.

研究テーマ：第二言語習得論
担当授業：第二言語習得研究概論

外池俊幸 教授

(TONOIKE, Toshiyuki) 文学修士

研究テーマ：辞書論、句構造文法、最適性理論による言語研究
担当授業：辞書論（科目担当）

◎世界日本語教育大会（台湾）

2010年8月に台北で行われた世界日本語教育大会での記念撮影。

本講座では学会活動に積極的に取り組んでいます。学会で発表することにより、研究のネットワークが広がっていきます。



◎博士論文口述試験後に

修士・博士両過程の学生全員が学位を取得できるように指導していきます。



◎教員の著書紹介

●Tamaoka, Katsuo, Michiko Asano, Yayoi Miyaoka, & Kazuhiko Yokosawa
Pre- and Post-head Processing for Single- and Double-Scrambled Sentences of a Head-Final Language as Measured by the Eye Tracking Method. *Journal of Psycholinguistic Research*, On-line First. (2013)

●Inagaki, S.
Transfer and Learnability in Second Language Argument Structure: Motion Verbs with Locational/Directional PPs in L2 English and Japanese. VDM Verlag. (2010)

●鷺見幸美（共著）
森雄一、西村義樹、山田進、米山三明（編）『ことばのダイナミズム』（くろしお出版）2008年

●杉村 泰
『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』（ひつじ書房）2009年



論文個人指導の最中。授業だけではなく、このような個人指導によって研究能力を高めていきます。



第二言語習得研究概論の参加者たち。講義、発表、ディスカッションと盛りだくさんの授業です。



日本語教育実習の参加者たち。和気あいあいと意見交換をしながら、より良い実習ができるように工夫しています。



玉岡賀津雄 教授

主任教員の玉岡は、これまで心理言語学の研究を行ってきました。そして当研究室では、言語および言語教育を対象としたあらゆる研究における実証的方法論を身につけることを主眼として指導を行っています。従来、言語の研究はとかく一個人内の「直感」で行われ、その議論は科学的な「実証」に基づかないまま展開される傾向があったといえるかもしれません。日本語教育学という研究領域の健全な発展のためには、然るべき手法で得られたデータの適切な検証を通して、言語現象が論じられなければならないでしょう。本研究室に所属する学生たちには、現象を科学的に実証する方法論を習得し、その上で日本語教育の様々な問題を考えられるようになってほしいと思います。

本講座で目指すのは「研究も教育もできる人材の育成」です。研究能力を高めることとともに日本語教授能力を高めることも重視し、日本語教育を実践する機会を提供しています。その一つが、名古屋大学留学生センターの協力を得て行う日本語教育実習です。一度も教壇に立ったことがない人も、ティーチング・アシスタントの協力を得て、安心して実習に臨むことができます。また、教育経験が豊かな人も、自らの問題意識やアイデアを生かした「新たな取り組み」にチャレンジしています。

講座に所属する学生の修士論文・博士論文の研究については、ハイレベルな学術誌に掲載されることを目標として、全教員が各専門分野の見地から厳密かつ親切な指導を行うよう努力しています。日々の指導の他に、毎月一回講座研究会を行い、講座全体で修士論文や博士論文の執筆をサポートする体制をとっています。本講座の講座研究会は学生主体で運営されており、教員だけでなく学生同士が自由に活発な議論を行っている点に特徴があります。この他、講座主催で様々な講演会やセミナー、シンポジウムを行ったり、国内外で活躍中の修了生や研究者と密接な連携を保ち、日本語・日本語教育に関するネットワークを広げたりするなど、活発な研究活動を行っています。

応用言語学

Applied Linguistics

日本語研究における各種の分析・調査の手法やその背景にある理論的基盤の習得を通じて、様々に変化する言語の実態に柔軟に対応できる研究者、教育者の育成を目指しています。また、日本語を主軸としながらも、他言語との対照を視野に入れた幅広い観点からの研究を奨励しています。所属する院生の出身は日本やアジア諸国と様々で、彼らの研究テーマも意味論、語用論、言語習得研究、社会言語学、コーパス言語学と多岐に亘っています。彼らの多くが将来日本語教師になることを希望していることを考慮し、研究指導に当たっては、日本語分析の方法論と日本語教育に関する実践的な知識との有機的な関連付けを重視しています。

【講座ホームページ】

<http://ouyou.lang.nagoya-u.ac.jp/>

教員と専門領域・研究テーマ

堀江 薫 教授

- ◎言語類型論と認知言語学の融合的研究（「認知類型論 (Cognitive Typology)」）
- ◎言語類型論・認知類型論・対照言語学の観点から見た日本語の文法・語彙現象の記述研究および日本語教育・外国語教育への応用言語学的研究
- ◎認知類型論および語用論の観点から見た日本語・韓国語の文法・語彙構造、文法化、言語接触現象の対照研究
- ◎言語類型論・認知言語学と第二言語習得研究の融合的研究（「応用認知類型論的研究 (Applied Cognitive Typology)」）

井上 公 教授

- ◎Probabilistic modeling of language acquisition
- ◎Probabilistic linguistics
- ◎Artificial grammar learning

奥田智樹 准教授

- ◎日仏対照言語学
- ◎統語論と意味論を融合する言語現象へのアプローチ
- ◎言語における主観性の問題

◎講座主催の公開講演会や研究発表会の開催

2010年度から昨年度までに国内外の研究者による公開講演会を計16回開催しており、昨年度は塚本秀樹氏、沈力氏、柴谷方良氏、Ritva Laury 氏をお招きしました。公開講演会には学内外から多くのご参加をいただきました。さらに、昨年度は講座院生による研究発表会を計6回行いました。この発表会は毎回院生1名～2名が発表を担当するもので、その都度活発な質疑応答がなされています。



◎自由闊達な雰囲気と研究指導

院生同士は、和気あいあいとした雰囲気の講座の院生室で、日々刺激あいながら研鑽を積んでいます。また、教員の側も、院生に対しては基本的に研究者対研究者という関係で臨みつつ、国内外の学会発表・学術誌への投稿について忌憚のない助言を行っています。研究指導の過程では、自由な雰囲気のもとで活発に議論をすることを重視しています。

◎教員の著書紹介

●堀江 薫（共著）

『言語のタイポロジー – 認知類型論のアプローチ–』

文法・語彙現象（例：受動構文）の通言語比較を通じて日本語と他言語の違いが言語話者の「認知」の違いにあることを論じました。

●堀江 薫（編著）

『Complementation』

認知・機能主義的言語学の観点から複文の一つである「補文」の形と用法を動機づける意味的要因を探求しました。





日本言語文化専攻
堀江 薫 教授

私は言語類型論・対照言語学と認知言語学・語用論を専攻しており、2010年4月に本講座に着任しました。

1994年から2009年までは、東北大学大学院において日本語を中心とする言語類型論、認知言語学、対照言語学、語用論分野の研究教育を行い、多くの修士論文・博士論文を指導してきました。2002年から2007年にかけては東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」リーダーとして言語学と脳科学の融合的研究・教育を推進しました。この間、研究面では「認知類型論」という学問分野を提唱し、教育面では多くの博士課程修了者、ポスドクが大学や研究所などの研究教育職に就くキャリアパスの道筋をつけました。

本講座では、「応用言語学概論 a・b」を担当し、大学院生とともに言語類型論・対照言語学、認知言語学、認知類型論、語用論、日本語・外国語の応用言語学的研究を進めて行けることを期待しています。

授業科目名「言語習得論 a・b」
論文を書く際に必要となる、
科学的なデータ処理の演習を
行っています。

授業科目名「応用言語学特殊研究 a・b」
日本語の文法に関わるテーマについて、
論文講読を基調にした問題演習と討論
を行っています。



現代日本語学

Japanese Linguistics

現代日本語学講座は、日本語の何らかの現象に正面から取り組みたい人にふさわしい講座です。日本語の言語事実を踏まえ、それをいかに説明し、理論化するかが目指すところです。三人の教員が担当し、専門は、音声学、音韻論、文法論、意味論、語用論、認知言語学、対照言語学におよびます。基礎研究が中心ですが、日本語教育への研究成果の応用を射程に入れた研究を行うことも可能です。また、日本語と韓国・朝鮮語などとの対照研究を志す人も歓迎します。本講座では、すでに25名の人が博士号を取得し、大学などの研究・教育機関で、研究者として活躍しています。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/gendai/>

教員と専門領域・研究テーマ

初山洋介 教授

(もみやま ようすけ)

専門は、意味論、認知言語学。主な著書に、『認知意味論のしくみ』、『日本語は人間をどう見ているか』、『日本語表現で学ぶ 入門からの認知言語学』、『認知言語学入門』（いずれも研究社、単著）があります。共編として、『講談社 類語辞典』（講談社）があります。近年、「百科事典の意味」に取り組んでおり、既発表論文として、「百科事典の意味とメタファー」（上野善道監修『日本語研究の12章』、pp.253-265、明治書院）、「百科事典の意味観」（山梨正明他編『認知言語学論考』No.9、pp.1-37、ひつじ書房）があります。

鹿島 央 教授

(かしまのむ)

専門は、音声学、音声教育。研究テーマは、日本語学習者の音声上の特徴を通して日本語の韻律的特徴を明らかにすることです。最近では特に、呼吸に注目し、リズム、アクセント、イントネーションの特徴を探っています。これらの研究を基に、新しい音声教育方法を策定し体系化を目指すことも課題としています。主な著書に『基礎から学ぶ音声学』（スリーエーネットワーク）があります。

李 澤熊 准教授

(い てぐん)

専門は、日本語学（意味論）、日韓対照研究です。主に語彙・文法項目を題材にした類義表現の分析に取り組んでいます。最近では、日韓対照研究の観点からも分析を進めており、日本語教育への効果的な応用、特に実用的な語彙・文法指導の方法を探っています。担当科目は「日本語文法論」です。著書に『主体の意図にかかわる副詞（的機能を持つ表現）の意味研究』（博士学位論文2003年）、『ことばのダイナミズム』（共著、くろしお出版）があります。

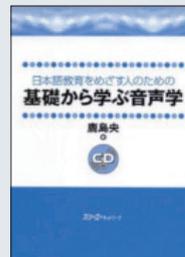
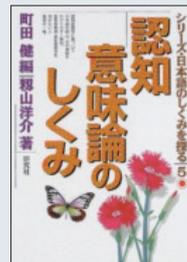
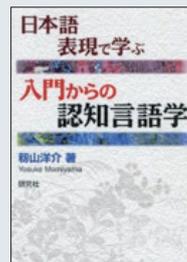
◎現代日本語学研究会

現代日本語学研究会は、1994年に始まり、2013年現在、137回を迎えました。毎回1名か2名の方が発表し、質疑応答も時間をかけておこないます。研究分野は「意味論」「文法論」「語用論」などを原則としますが、理論的枠組みは問いません。参加者は主に東海地方の大学教員、大学院生ですが、来ていただける方はどなたでも大歓迎です。

◎名古屋音声研究会

毎週金曜日の5時から1時間半程度行っている名古屋音声研究会では、修士論文あるいは博士論文の構想、途中経過、投稿論文の中身などを、順番を決め発表しています。ここでは、活発な議論を通して問題点の整理をしたり、解決の糸口をみつけたりすることで、お互いの研鑽に努めています。詳しくは、日本音声学会の学会誌、『音声研究』の17巻第1号(2013)を御覧ください。

◎教員の著書紹介





◎修了生の主な 就職先(専任教員)

名古屋大学、岐阜大学、武庫川女子大学、鹿児島純心女子大学、東京外国語大学、中部大学、琉球大学、中央学院大学、福島高専、愛知文教大学、高田短期大学、東北学院大学、国際交流基金、名古屋学院大学、名古屋短期大学



「現代日本語学概論」授業風景。

現代日本語学講座博士学位論文リスト

- (1) 木下りか 1999.03『文末における「真偽判断のモダリティ」形式の意味』
- (2) 田中聡子 1999.09『視覚動詞の意味論』
- (3) 鈴木智美 2000.03『人と言葉との関わりの探求に向けてー「言葉で言い表せない」体験をめぐる現代日本語研究と力動記号学の観点からの考察ー』
- (4) 鷺見幸美 2002.03『現代日本語移動動詞の意味論』
- (5) 鷺留美 2003.03『ジェンダー化された「日本語」ー形成過程、及びその象徴的意味と政治的機能』
- (6) 李澤熊 2003.03『「主体の意図にかかわる副詞(的機能を持つ表現)」の意味研究』
- (7) ケキゼ・タチアナ 2003.03『現代日本語の非断定表現~「そうだ」、「げ」、「っまい」を中心に~』
- (8) 武藤彩加 2003.12『日本語の『共感覚的比喩(表現)に関する記述的研究』
- (9) 山本裕子 2006.01『方向性を持つ補助動詞の意味と機能』
- (10) 山森良枝 2006.10『日本語の限量表現の研究』
- (11) 高橋圭介 2007.03『現代日本語における思考動詞の意味分析』
- (12) 松岡みゆき 2007.10『現代日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」ー意味論と語用論の接点を求めてー』
- (13) 山本幸一 2008.03『メトニミーの認知言語学的研究ー非自立型メトニミーを中心に~』
- (14) 有園智美 2009.03『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』
- (15) 馬場典子 2009.07『怒りを表す動詞(句)の意味分析』
- (16) 中林律子 2009.07『「驚き」・「嫌」という感情表出に関する音声学的研究ー日本語母語話者とロシア人日本語学習者を対象とした実験に基づいてー』
- (17) 三木理 2010.03『「~じゃない」の発話意図に関する音声学的研究ー韓国語を母語とする日本語学習者の音響的、聴覚的分析に基づいてー』
- (18) 野呂健一 2010.03『現代日本語の反復構文ー構文文法と類像性の観点からー』
- (19) 野田大志 2011.02『現代日本語における複合語の意味形成ー構文理論によるアプローチ』
- (20) 堀川智也 2011.03『題目語の諸相』
- (21) 加藤恵梨 2011.11『感情を表す形容詞の意味分析』
- (22) TAYLOR Rebecca Louise 2012.03『英語話者による日本語の語アクセントの習得』
- (23) 大西美穂 2012.03『日本語存在・所有表現の認知言語学的研究』
- (24) 梶川克哉 2012.09『複文表現の意味的カテゴリーー「目的」「付帯状況」をめぐる~』
- (25) 許永蘭 2013.03『現代日本語における「切断・分離」を表す動詞の意味分析』

日本語教育方法論

Japanese Language Teaching Methodology

日本語教育方法論講座は、その名の通り日本語の教育の方法を構築していくための理論的背景となる研究を行っています。また、それらの研究成果を応用し日本語教育の方法を開発、実施し、その効果と課題を明らかにする研究を行っています。理論的背景となる研究としては接触場面における談話分析、言語習得研究、学習者や教師のピリーフ構造の分析、学習者や教師のストラテジー研究などがあります。また、応用的研究としては、学習環境や評価方法の提案、コンピューターを用いた学習支援や教材の開発を行います。さらにその成果を確認するため、これらの方法の信頼性や妥当性を検証する研究を行っています。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/houhouron/>

教員と専門領域・研究テーマ

村上京子 教授

教育心理学の観点から実証的に第二言語習得を検証し、日本語教育に有用な教育方法の開発をめざしています。また、日本語教育におけるさまざまなテストの開発や分析など教育評価に関する研究を行っています。

衣川隆生 教授

口頭発表技能、及び作文技能育成を目的とした教室をフィールドとしてアクションリサーチの手法をとり、学習者オートノミーを育成するための学習環境デザインのあり方を研究しています。

石崎俊子 准教授

コンピュータの特性を最大に生かした日本語コンピュータ教材の開発をしています。また、コンピュータを用いた日本語教育における学習効果及び学習方法を分析し、更に優れた教材の開発に発展させることを目指しています。

佐藤弘毅 講師

ICTを用いて日本語教育をはじめとする授業および学習を効果的に支援するための基礎研究を行っています。電子黒板を活用した授業支援やコンピュータを介したコミュニケーション研究などに取り組んでいます。

◎修了生の声 (深川美帆さん)

私は大学で日本語教育を専攻した後、海外で2年間日本語教師を経験し、帰国後も専門性を高めたいと思い、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に進学しました。大学院では日本語学習者の談話における接続表現の習過過程について研究しました。現在は金沢大学留学生センターで日本語教育を担当しています。これまでも日本語教育にはずっと携わってきましたが、一機関に属して留学生教育全般に関わるようになった今、大学院で学んだあらゆることが日々の仕事に直結していると実感しています。



◎在学生の声 (横山理恵子さん、写真左)

日本語教育方法論講座の特徴は日本語教育の「教育」の部分を実践的に学び、研究するという点です。教育方法に関する理論から実践方法を導き、現場で活かせる応用力を養っています。

私はこれまでに日本語教師の経験がありましたが、実際の現場で疑問に思ったこと、解決できずにいた事柄などが、授業で知識を深めるにつれ理解できるようになり、更なる意欲へとつながりました。ここで得られたことは、今後、私の支えとなることでしょう。研究の分野だけでなく、国内外で活躍するための能力も身につけていくことができると思います。一緒に素晴らしい教育方法を探求しませんか。



◎主な就職先

金沢大学、三重大学、ソウル女子大学校、帝京大学、東京外国語大学、東海大学、釜山外国語大学校、愛知教育大学、国際交流基金派遣等



村上京子 教授

担当科目：日本語教育評価論
「日本語教育におけるテストと評価」

教育評価に関する基本的な知識を身につけ、日本語教育の現場で役立つ評価技術を獲得することを目的としています。授業では実際にテストを作成し、話す能力や書く能力の評価、分析を行います。



石崎俊子 准教授

担当科目：コンピュータ支援日本語教育方法論
「CALL教材の評価、分析及び開発」

「日本語コンピュータ教材」を自分の手で作成したいと希望している人達のために、現教材を分析及び評価するところから始め、様々な種類の日本語 CALL教材の作成を試みます。また、動画の撮影と編集を経て最終的に動画入りのコンピュータ教材プロジェクトを完成させます。



衣川隆生 教授

担当科目：日本語教育方法論概説
「学習環境デザインの理念とその手法」

言語教育方法を立案する際の指針となる能力観、学習観、教育観を認知的アプローチと社会構成主義に基づいた社会文化的アプローチの観点から整理します。その上で学習者オートノミーの育成を視野に入れた調査手法、学習環境デザインを検討します。



佐藤弘毅 講師

担当科目：日本語教育工学
「日本語教師のための教育工学の理論と教育メディアの活用」

教育工学の最新の理論を知り、その理論を活かしたICT（情報コミュニケーション技術）の活用演習を通じて、日本語教師が授業の中で主体的に教育メディアを活用するための基礎知識を学びます。

多元文化論

Multicultural Studies

世界の諸地域における文化のあり方を言語・社会・民族・人種・性差などを踏まえつつ多角的に捉えるとともに、異文化の共生を理解するための理論的基盤を構築することを目指します。本講座はまた、ディシプリンと地域研究の調和と融合の場であることを志向しています。実際、講座所属教員は、各自の専門研究領域を持つとともに、さまざまな言語を用いて研究を行っています。こうした教員の協力の上に、本講座では異文化接触や文化交流の研究、多様な視点からの文化分析、地域研究などを多くの言語を用いて行うことができます。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/tagen-koza/>

教員からのメッセージ

飯野和夫 教授

近・現代フランス思想を研究しています。現代の思想に興味を持っている一方、そのルーツを探る形で18世紀頃の思想を研究してきました。現在は、現代の思想における西洋文明の再検討にも関心を持っています。授業はフランスの思想が中心ですが、著作を講読する際は英訳なども用い、フランス語を使用言語としない院生にも配慮して進めています。

鈴木繁夫 教授

ミルトンを軸に、西洋の近代宗教倫理想から日本の文化思想を再考しています。また16-17世紀のエンブレムが、西洋古典を媒介としながらルネッサンスの法律・倫理とどのように絡み合っていたのか探っています。英語教育にも触手を伸ばし、異文化間の対話を促進する方法を模索しています。

田所光男 教授

比較文学比較文化が専門で、諸文化の交錯する状況を生きる人々のアイデンティティ模索を広く研究してきました。最近、マイノリティ状況と共生の問題を中心にして(国際シンポの項目を参照)、特に、ユダヤ人アイデンティティ、ラファデイオハーン(ラファエル)の宗教観、ポピュラー音楽などに関心をもって研究を進めています。

水戸博之 教授

スペイン語圏とポルトガル語圏を中心に、文化史や宗教思想史を研究しています。担当科目・中南米言語表現論演習abは、スペイン語とポルトガル語2言語の習熟を義務付けていますが、指導領域は言語圏に限定されません。近年は、日欧交流史や欧米世界における日本文化発信などにも興味を持っています。

古田香織 准教授

文化記号論の枠組みの中で、コノテーション、イメージをキーワードに、広告、女性誌、都市を分析しています。また、もともとドイツ語が専門であり、両者を生かして、19世紀末の総合芸術誌「ユーゲント」をとりあげ、メディア文化論を展開しています。

◎国際シンポジウム

「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」 (2013年3月)

現代世界における多様な民族的・社会的マイノリティを対象にして、そこに認められるマイノリティ・マジョリティ関係を考察することで新たな共通性を構想する、総合科学としての〈比較マイノリティ学〉の構築を目指す国際的共同研究。



◎学術講演会

カルロス・アスンサオン教授(トラス・オス・モンテス・エ・アルト・ドウロ大学)講演会
「16世紀ポルトガル語文書におけるポルトガル語」(2010年5月)

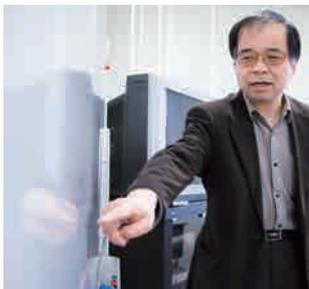
アブデラフド・アムシュ教授(リール第一大学)講演会
「現代社会におけるマイノリティ・フランスの事例-」(2010年10月)



アムシュ教授の講演会



水戸教授(右端)「研究会／ブラジル・ポルトガル語の口語文法についてブラジル人留学生と意見交換」



飯野教授「現代文化思想分析論演習」



鈴木教授「離婚の歴史図像学」



古田准教授(研究室にて)

●論文指導例

飯野和夫

- ・「ゴンクール兄弟の18世紀崇拜と近代性」(博士論文 [原文フランス語])
- ・「狂気とコギト - フーコーが見たデカルトの第一省察 -」(修士論文 [原文フランス語])

鈴木繁夫

- ・「サイバー日本社会における沈黙のコミュニケーション」(博士論文 [原文英語])
- ・「『撰大乘論』における無住処涅槃の死生観」(修士論文)

田所光男

- ・「中国・西双版纳タイ族における出産の医療化と女性たちの選択」(博士論文)
- ・「Study of *Chita* by Lafcadio Hearn. The Sea in His Inner World」(修士論文)

水戸博之

- ・「在日ブラジル人若年層による日本語借用語使用」(博士論文)
- ・「日本におけるブラジル人児童生徒の読解力」(修士論文)

古田香織

- ・「広告コピーおよび新聞見出しの文末に現れる格助詞「へ」について - 格助詞「に」との互換性という観点から -」(博士論文)
- ・「望まれる女性像 - 1970年から現代までの資生堂の化粧品広告に見られる女性像の変遷について」(修士論文)



田所教授「諸文化共生論概論」



田所研究室の雑誌

先端文化論

Contemporary Arts and Cultural Studies

“世界各地で新たに生じつつある先端的文化の諸相を言語文化的視点から捉え、流動する社会状況に対応するための世界認識を確立するとともに、時代と文化形成との関連についての理論的基盤を構築する。”

これが当講座の理念ですが、要するに、現代音楽、モダンダンスからポップカルチャーにいたる現代の文化や、私たちの生活の隅々にまで浸透している様々な価値観を現代思想や最先端の批評理論を縦横無尽に使って読み解いてゆく、ということです。

それらは、ときに漠然としたイメージで語られ、ときに既成の概念や言葉の束から逃れ去るものとして扱われがちですが、そうした、“うまく言葉にならないもの”に言葉を与えてゆくことこそが、学問を進めてゆくにあたって何より大切なことであると私たちは考えています。

そうした作業を丹念に、しかし同時に、楽しみながらおこなってゆく学生／研究者を、私たちはつねに歓迎いたします。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/sentan/>

教員と専門領域

越智和弘 教授

OCHI, Kazuhiro

1. 資本主義の精神
2. 労働力均質化時代の芸術と思想
3. ドイツ文学史

藤井たぎる 教授

FUJII, Tagiru

1. 音楽思想
2. 西洋音楽史
3. 前衛芸術論

布施 哲 准教授

FUSE, Satoshi

1. 現代政治理論
2. イデオロギー分析
3. 思想史

山口庸子 准教授（講座主任）

YAMAGUCHI, Yoko

1. 身体文化史
2. 西洋舞踊史
3. ドイツ文学

◎シンポジウム

「境界の消失と再生：現代音楽の諸相」における作曲家マイケル・シェリー（バトラー大学教授）の基調講演より



◎教員の著書紹介

●山口庸子

『踊る身体の詩学』名古屋大学出版会

●越智和弘

『女性を消去する文化』鳥影社・ロゴス企画部



◎修了生の就職先

京都精華大学、愛知学院大学、川口短期大学、関東学院大学、県立広島大学、小山登美夫ギャラリーなど

公開講座「芸術におけるオリジナリティとフェイク」
 アメリカ合衆国パトラーク大学における大学関連事業についての報告
 (第5回愛知県立大学法人理事長特別研究)
 愛知県立芸術大学・名古屋大学国際言語文化研究科共催



■ 日時：2012年2月28日(火) 18:45~20:45
 ■ 会場：愛知芸術文化センター12階・アートスペースE (名古屋市地下鉄栄駅より徒歩2分)
 ■ 講座内容：①
 「私の音楽をふりかえって」小林聡(愛知県立芸術大学・作曲)
 ~1980年代の音楽と自作品のかわりについて語る。
 「音楽における引用について」藤井たぎる(名古屋大学・音楽思想)
 ~引用が盗用や剽窃でないとしたら、それにいったいどんな「効用」があるのだろうか。ベリオの引用の織物といふべき『シンフォニア』などを例に考える。
 「ゴッホの贋作について」小林英樹(愛知県立芸術大学・油画)
 ~日本人がよく知っているゴッホの中にも贋作が紛れ込んでいる。
 「1900年パリ万博の真奴とロイ・フラール」井上さつき(愛知県立芸術大学・音楽学)
 ~前衛舞踏家ロイ・フラールの劇場で行われた真奴のパフォーマンスはパリ中の人気をさらった。その秘密は何だったのか。
 入場無料
 当日、同センター10階で愛知県立芸術大学美術学部 第43回「卒業、修了制作展」開催中

公開講座「芸術におけるオリジナリティとフェイク」
 (愛知県立芸術大学音楽学部との共催)

越智和弘 教授

「人間の価値を数値的観点からのみ測るようになるそもその起源は、16世紀初頭に起きた宗教改革に見いだせる。そこで生まれた天職倫理と禁欲のスピリットを駆動力に5世紀近く展開してきた近代資本主義の歴史のなかで、20世紀後半期に勃発した性の解放運動とフェミニズムが、性差と人種の差を超えて人間を労働力として動員するうえで、避けて通れない役割を果たした可能性を考えることが研究の主題である。」

藤井たぎる 教授

「最近あれこれ頭をひねっているのは、西洋音楽の構造と資本主義の仕組みの相同性についてです。調和和声というコード進行に基づく音楽のつくりは、まるでマルクスの価値形態論のようですし、シェーンベルクやベルクの12音技法に至っては、“価値の増殖”を音符で表象しているかのようです。西洋音楽史は資本主義の発展と不可分であるということなのでしょう。」

布施 哲 准教授

「近年、私はオーストリアの経済学者、ヨーゼフ・シュンペーターの経済社会論についてあれこれ思索にふけています。彼の『資本主義・社会主義・民主主義』は、経済学畑の人たちからはあまり重要視されない著作ですが、彼の予言めいた記述の数々は、昨今の経済的、文化的な状況をほぼ言い当てており、政治学や社会哲学の分野にとっても示唆に富んでいます。」

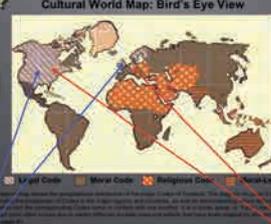
山口庸子 准教授

「私は、言説やメディアと、身体的なパフォーマンスが相互に作用し合って、その社会に特徴的な身体観や身体イメージが構築されていく、動的なプロセスに関心があります。最近では、現代社会の幕開けとなったモダニズムの時代に、機械的身体や人形的身体がどのように表象・上演されたのか、演劇史・舞踊史・人形劇史を視野に入れつつ研究を進めています。」

性の解放と資本主義
 1. 世界の文化地図と女性アート

1. 資本主義がもっとも発達した地域と性の解放運動・フェミニズムが起きた地域が重なるのはなぜか?

Cultural World Map: Bird's Eye View



世界の文化地図

資本主義の精神がもっとも浸透した地域 ←→ 性の解放運動とフェミニズムが起きた地域

ふたつの地域が重なるのはなぜか?

越智和弘「世界の文化地図と女性アート」

境界の消失と再生
現代音楽の諸相
 シンポジウム・トークコンサート・ワークショップ
 日時：2012年11月4日(土) 12:00-18:00
 会場：愛知県立芸術大学美術学部

現代音楽の諸相

シンポジウム
 12:00-14:00
 14:00-16:00

トークコンサート
 16:00-18:00

ワークショップ
 18:00-19:00

シンポジウム「境界の消失と再生：現代音楽の諸相」(愛知県立芸術大学音楽学部との共催)

研究者・作曲家が
 現代日本の
 音楽トレンドを斬る

鑑賞術 J-Pop

入場無料
 定員 150名

日時：2010年11月13日(土)
 13時~18時
 会場：愛知県立芸術文化センター12階
 アートスペースA

公開講座「J-Pop 鑑賞術」(愛知県立芸術大学との共催)

2012年3月31日(日)
 名古屋大学 演劇 演劇研究センター
中島輝彦子氏 講演会
 めぐり/あう メディアとしての身体
 日時：2012年3月31日(日) 14:00-17:00
 会場：名古屋大学演劇研究センター
 対談：テモントレーション 砂流 理



講演会「めぐり/あう メディアとしての身体」

講演会
意志と変革の思想
 ~「国家」と「所有」再考~
 講師：布施 哲
 会場：名古屋大学演劇研究センター
 日時：2012年9月28日(土) 14:00-17:00



講演会「意志と変革の思想」

講演会
精神分析の射程II
 ~後現代資本主義のメディア文化、イデオロギー~
 立木謙介
 会場：名古屋大学演劇研究センター
 日時：2012年9月28日(土) 14:00-17:00



講演会「精神分析の射程II」

アメリカ言語文化

American Studies in Language and Culture

アメリカ言語文化講座は、北米を中心とする言語文化の諸相を批評的・学際的に分析するとともに、英語教育のあり方を科学的・実践的に追究することを旨とする講座です。アメリカ文学・文化の分野では、アメリカの作家・詩人らの研究に加え、アメリカ音楽、映画なども研究対象となります。2012年には「名古屋大学アメリカ文学・文化研究会」を設立しました（www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/nu-alcs/）。英語教育の分野では、第二言語習得の科学的側面と分析手法を学ぶ一方で、コンピュータとネットワークを利用した教育の手法と教材研究などについて学ぶこともでき、理論と実践の両面の研究を行うことができます。

【授業科目】

- アメリカ文学・文化論Ⅰ・Ⅱ ●言語文化情報論
- 第二言語習得演習 ●社会言語学入門 ●北米文化研究

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/america/>

教員と専門領域・研究テーマ

長畑明利 教授

アメリカ文学・文化／20世紀アメリカ詩／多文化社会の表象

尾関修治 教授

英語教育／コンピュータとネットを利用した教育法の開発

村尾玲美 准教授

第二言語習得論／音声言語認識メカニズムの解明

◎修了生の声1

アメリカ言語文化講座博士前期課程を修了した横山雅子です。高校の英語授業において、タスク中心の指導法「TBLT」が学習者の潜在的英語能力の伸長に効果的であるかを研究しました。現在は高校の英語教員として働いており、大学院で学んだ事を現場に活かせるように頑張っています。



◎修了生の声2

アメリカ言語文化講座修了生の本田安都子です。2009年3月に本研究科博士後期課程を満期退学し、2013年に博士号を取得しました。本研究科在籍中は、主にユダヤ系アメリカ文学の研究を行い、博士論文では、20世紀初頭に活躍したアンジア・イージアスカというユダヤ系女性作家の作品にみられる贈与の表象に関する研究をしました。2013年4月からは、福井大学教育地域科学部言語教育講座英語サブコースの専任講師として、主に米文学の授業や共通教育の英語授業を担当しています。





長畑明利 教授

東京外国語大学外国語学研究所
修士課程修了。1988年名古屋大
学着任、2004年より現職。専門分
野はアメリカ文学・文化。



尾関修治 教授

名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。東海学
園女子短期大学、福井大学教育学部、中部大学国際関係学部
を経て2009年より現職。研究テーマは英語教育でのeラーニング
と学習管理システム。

村尾玲美 准教授

名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了。早稲田
大学オープン教育センター助教を経て2010年より現職。専門
分野は第二言語習得論で、主な研究テーマは音声言語認識メカ
ニズムの解明。

【長畑】モダニズム以後のアメリカ詩を中心に、文学テキストに見られる
言語的特徴や、詩人・小説家の「言葉」についての考えを明らかにし、そ
れらが持つ意味について検討する作業を進めています。これに加え、アジ
ア系、アフリカ系など人種・エスニシティに基づく文学・文化研究や、ポピュ
ラー・カルチャーの研究も手がけています。学生の皆さんには、自分なり
の関心にしたがって、広く、またじっくりと作品を読み進めていってもら
いたいと思います。

【尾関】現代のコミュニケーションはコンピュータやネットの利用なしには
ありえなくなっています。英語学習のリソースとして、また学習コミュニ
ティとしてのネットの利用手法、そこでの教授法や教員と学習者の役割に
ついて研究しています。一方で効果的な学習方法としてのeラーニング教
材の開発や検証、学習の場としてのCALL（コンピュータ支援語学教室）
やLMS（学習管理システム）を利用した授業研究も行なっています。

【村尾】言語の習得が得意な学習者と不得意な学習者はどこがちがうので
しょうか。どのような学習方法が効果的なのでしょうか。私たちは直感的
に良いと思う方法で外国語を教えたり学んだりしています。直感はもちろん
大事ですが、本当に効果があったのか、どういう因果関係が成り立つの
か、ということについては、科学的に実証しなければわかりません。「第二
言語習得演習」ではこれらの課題を科学的に検証する方法を学び、教育実
践への応用について議論します。

東アジア言語文化

East Asian Studies

東アジア言語文化講座では、東アジア諸地域（中国、韓国・朝鮮、ロシア）における言語文化の諸問題に対して学術的な接近ができる人材の養成を目指しています。

本講座は言語研究と文学・文化研究を基軸に展開しています。中国語、韓国・朝鮮語、ロシア語などを対象とした個別言語の研究や各言語に関する教授法の研究、中国近現代文学に関する研究を中心としており、その他にも中国少数民族や韓国・朝鮮の社会文化に関する研究など、指導領域は多岐に渡ります。

本講座の修了生の多くは、それぞれの専門分野のスペシャリストとして国内外の企業および教育研究機関で活躍しています。

【修了生の就職先の一例】

(日本) 名古屋大学、中部大学、中京学院大学、愛知淑徳大学、星城大学、名古屋芸術大学、中日本自動車短期大学、名古屋韓国学校、(株) 学生情報センター、(株) 防長トラベル、(株) ヨシタケ、岐阜工業株式会社、(株) 三光マーケティングフーズ
 (中国) 黒竜江大学、東北師範大学、北京外国語大学、中国内モンゴル大学、上海交通大学、上海海洋大学
 (台湾) 国立虎尾科技大学、文藻外国語学院
 (韓国) 弘益大学

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/asia/>

教員の専門領域・研究テーマ

柳沢民雄 教授 (YANAGISAWA, Tamio)

研究テーマ：言語類型論、カフコース言語学、バトル・スラヴ語学
 担当授業：東アジア言語論演習

楊 暁文 教授 (YANG, Xiaowen)

研究テーマ：中国近現代文学、世界華文文学
 担当授業：漢民族文化論

丸尾 誠 准教授 (MARUO, Makoto)

研究テーマ：現代中国語文法、中国語の移動動詞の研究
 担当授業：現代中国語表現論

勝川裕子 准教授 (KATSUKAWA, Yuko)

研究テーマ：現代中国語文法、領属表現に関する研究、中国語教育
 担当授業：現代中国語表現論演習

宇都木昭 准教授 (UTSUGI, Akira)

研究テーマ：言語学（音声学・音韻論）、韓国・朝鮮語学
 担当授業：韓国・朝鮮語表現論演習

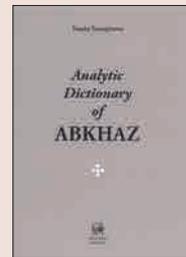
◎教員の著書紹介

●Tamio Yanagisawa

『Analytic Dictionary of ABKHAZ』
 ひつじ書房 2010年2月発行

●柳沢民雄（共著）、町田健監修

『ニューエクスプレス・スペシャル ヨーロッパのおもしろ言語』白水社
 2010年7月発行



●楊 暁文

『異邦人と Japanese - 異文化とは何か国際理解とは何か』白帝社
 1997年7月（初版発行）

『豊子愷研究』東方書店 1998年2月発行



●丸尾 誠

『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社 2005年10月発行

『基礎から発展まで よくわかる中国語文法』アスク出版 2010年10月発行



●宇都木昭

『朝鮮語ソウル方言の韻律構造とイントネーション』

勉誠出版 2013年2月発行

●東アジア言語文化講座が求める人材

東アジア言語文化講座では次のような人材を求めます。

(1) 真摯な人。

東アジア諸地域の研究には膨大な蓄積があり、どのような問題に迫るにもそれを無視することはできません。所定の期間内に研究結果をまとめるには主な先行研究を精査しなければなりません。

(2) 常識に挑む人。

学術研究は定説の確立を求めます。しかし、定説を崩すことなしに学術研究の大きな進展はありません。先行研究で得られた知見を踏まえながらも、それに疑いの目を向けなければなりません。

(3) 洞察力のある人。

言語文化の現れ方は一見無秩序に見えるほどに多様です。学術研究はその背後にある規則性・法則性を追究します。調査・観察された現象の背後を見通す透徹した目が必要です。

(4) ロマンを持つ人。

学術研究には明確な目標が必要です。しかし、目だけの目標を追うだけでは思考が萎縮します。今やろうとしていることが将来の自分の活動にどのように活かされるのか、射程の長い目標を持つことが必要です。大きなロマンを持って研究に望んでください。

●東アジア言語文化講座を志望する皆さんへ

まずは自分が本気で取り組みたいテーマを明確にしてください。テーマの選択が自分の将来の身の振り方に重大な影響を及ぼすことになります。研究の成果は論文という形で示すしかありません。日々論文執筆に追われる生活は苦しいものですが、自分なりに満足のいく論文に仕上がったときの爽快感を是非とも味わってほしいと願っております。私たち教員の指導がそのための一助となりえることが、何よりの喜びです。

研究は基本的に孤独で地道な作業です。しかし、何からどう手をつけたらいいのか、この方向で間違いのないのか等不安を感じた時、周りには互いに支え合い、議論できる仲間がいます。叱咤激励し（時にはプレッシャーを与え）アドバイスしてくれる教員もいます。そのような同志と共に、自らが心惹かれてやまない対象を掘り起こし、追究していきましょう。

◎国際シンポジウム&フォーラム

世界華文(華人)文学(対話創生プロジェクト2010) 2010年10月11日 於名古屋大学
パネリスト:朱文斌、楊曉文、星野幸代、松下千雅子、司会:楊曉文



第22回ことわざフォーラム 越境することわざ 2010年10月30日 於名古屋大学
ことわざ学会・名古屋大学大学院国際言語文化研究科共催



ヨーロッパ言語文化

European Studies

当講座は、近代から今日に至るまでのヨーロッパに見られる多様な文化の形態を現代的な視点で研究しようとする学生、現代ヨーロッパの社会事象を探究したい学生を広く受け入れます。講座の学生の専門も、チャールズ・ディケンズ、エリザベス・ギヤスケル、トマス・ハーディ、ハインリヒ・フォークラー、ファニー・メンデルスゾーン = ヘンゼル、近代上海におけるメディア空間、フランスの移民子弟の教育、フランスにおける非婚化、イギリスにおける女性とミッションなど、様々な分野に及んでいます。必要なのは研究の強い動機と向学心です。その社会も文化も無限の陰影に富むヨーロッパからあなた自身の研究テーマを見つけ、それを追求することで、今の自分を変えるチャンスをつかんでみませんか？

【修了生の主な就職先・勤務先】

名古屋大学、早稲田大学、東京理科大学、豊橋技術科学大学、名城大学、松山大学、岐阜県立高校、ヤマハ英語教室、ギノージャパン、静岡新聞

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/europe/>

教員と専門領域・研究テーマ

松岡光治 教授

専門領域：19世紀イギリス文学、ヴィクトリア朝文化史

上原早苗 教授

専門領域：19世紀イギリス小説、ヴィクトリア朝文化研究

西川智之 教授

専門領域：ドイツ語圏の世紀転換期の文化・芸術

村主幸一 教授

専門領域：シェイクスピア、西洋演劇、パフォーマンス研究

鶴巻泉子 准教授

専門領域：ヨーロッパ地域研究、フランスのマイノリティ研究

◎在校生の声

ヨーロッパ言語文化講座の特徴は、学生に対するサポートが充実しているところだと思います。指導教員をはじめ、他の先生方からも異なった、新たな視点からの助言をいただける、自分でも贅沢だと思うくらいの良い環境です。授業はどれもメリハリがあり、時にワイワイ、時に真面目にと、受講生はみんなうまく切り替えて臨んでいます。

浅井里嘉子さん（博士前期課程2年）

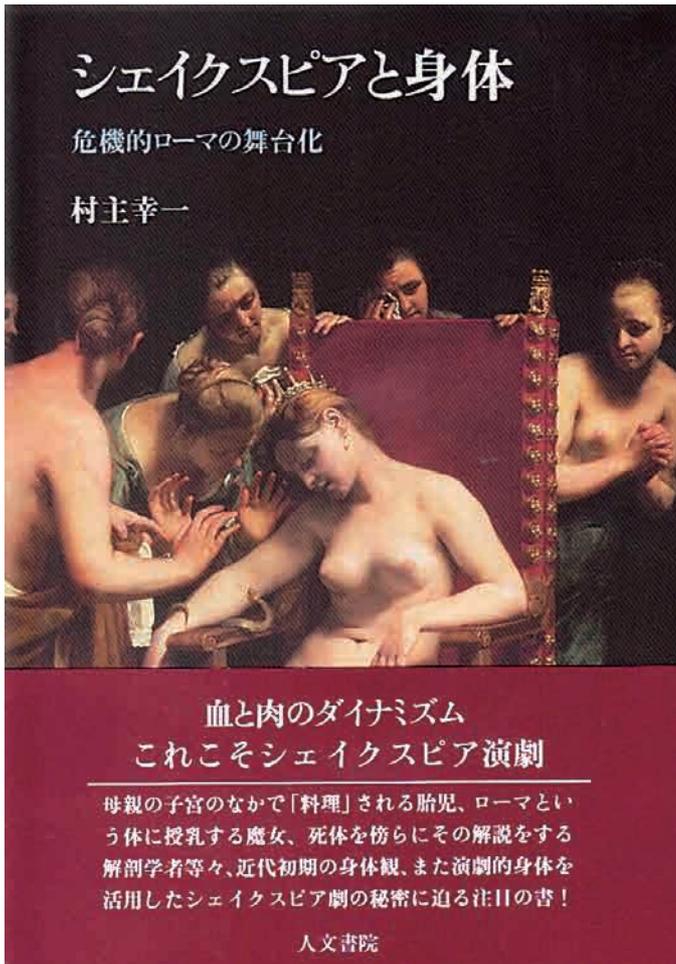


◎修了生からの一言

私は2007年4月に後期課程に入学し、2011年3月に「国際都市におけるメディアと近代性」の研究で博士号を取得しました。博士後期課程修了後国際言語文化研究科の助教として採用され、現在に至ります。ヨーロッパ言語文化講座在籍時、主に村主幸一先生の下でメディア／パフォーマンス研究について勉強しました。現在、科研費の分担で「戦時下の移動演劇」の研究に取り組んでいます。大学院の勉強を通して得た専門知識や研究手法は現在の研究につながっています。



国際ワークショップで発表する楊韜さん
(名古屋大学大学院助教)



(学生と先生との対話)

S: 先生の新刊書、読ませていただきました。

T: それは感激だ。あとがきしか読まない人も多いからね。それで感想は？

S: 『ハムレット』しか読んだことがない僕としては、古代ローマの歴史を題材にしたローマ史劇というのは、なんだか取っ付きにくいですね。

T: 主人公のハムレットは劇中、内省を繰返し、彼の動機探しに我々を向かわせる。そんなハムレットは自意識の強い近代人の原型のようにみえるだろう。その姿は、現代の観客も同一化しやすいわけだ。

S: ローマ史劇の登場人物との同一化はむずかしいですね。

T: そうだろう。劇の冒頭から極めて残酷だったりするからね。暴力を受ける者たちの傷や流血はほんじゃじゃない。

S: そのような暴力は、シェイクスピアが文明化の過程の早い段階に位置する作家だからでしょうか。

T: いや、それよりも演劇そのものが、登場人物や、それを演じる役者の身体性をクローズアップするからだと思うね。

S: 身体性といえば、先生の本を読んで、現代人には馴染みの薄い歴史的な身体観にも触れることができました。

T: それはなにより。テキストには歴史的な厚みというものがあ、そのような層を掘り下げると、また別の局面が浮かび上がってくるものなんだよ。

S: ギリシア・ローマの古典もキリスト教文化も、シェイクスピア劇の地層をなしているということが、先生の本からよくわかりました。

T: 「強い詩人」という概念があるんだが、それは文化の伝統を継承し、それと格闘することで、独自の作品を作り出すことができる人をいうんだよ。シェイクスピアもその一人だと言えるね。



松岡光治 教授

19世紀イギリス文学のテキストを主として心理的リアリズムの観点から分析しています。現在は、ヴィクトリア朝の都市文化における明と暗をイメージ化した言説、そして権力の実践に付随する屈折した心理が投影された言説について、歴史的・社会的コンテクストを踏まえて考察することに関心があります。授業では、小説の精読を通して英語読解力を養成しながら、細かい問題を深く掘り下げて論文作成に役立てる方法を教授しています。



上原早苗 教授

ヴィクトリア朝小説を主に研究しています。現在は、ヴィクトリア朝の出版制度・検閲制度というコンテクストに着目しながら、小説テキストを分析しています。検閲制度を考えるにあたり、文化研究の枠組みにも注目したいので、授業ではまず文化研究の方法論を検討し、それからテキストをじっくり読むようにしています。受講生はとても積極的に、質問も次々に出てくるので、毎回、教室に行くのが楽しみです。



西川智之 教授

研究の関係上、100年以上以前の雑誌や新聞が資料として必要になりますが、デジタル化されてドイツやオーストリアの大学図書館などで公開されているものも多く、インターネットのありがたさをつくづく感じています。ただしそうした資料の分析には、丹念に読み込むという昔ながらの根気のいる精緻な作業が必要となります。学生には研究のそうした地道な面を伝えられたらと思っています。



村主幸一 教授

70年代末に述べられた「文学の領域でも明治以降の日本では(中略)小説の特権的位置が当たり前になっていて、詩や戯曲は非常に狭いところに押し込められてきた」(『劇的言語』)という言葉が今も当てはまる状況があると感じています。近代演劇の代表であるチェホフとイプセンの作品は文庫本で読めるものはわずか。この劣勢を跳ね返し、ドラマの特質と面白さを多くの人々に伝えたいと思っています。



鶴巻泉子 准教授

フランスの地域・移民問題をEU統合を背景にした国民国家の変容という観点から研究しています。最近ではスペインのカタルーニャ地域などとの比較も始めました。歴史的に独自の文化を有すると考えられてきた地域が、EU拡大が進み移民問題が深刻化する現在、国民国家との関係をどのように変容させているのか、領域性と所属の関係はどう変化するのか、フランス社会はマイノリティ問題をどう捉えなおしてしていくのか、に関心があります。

ジェンダー論

Gender Studies

当講座では、フェミニズム、ジェンダー、セクシュアリティ、女性の（社会）心理に関する研究を基盤に、文学、文化、社会、経済、コミュニケーションにおける事象と表象を批評的・学際的に検証し、それを通じて、社会の既成概念にとらわれない人材育成と研究成果を社会に還元することを目指しています。

講座の学生の皆さんには、所属教員の院演習や個別 / ゼミでの論文指導をはじめ、読書会や各種セミナー、講座の研究発表会等への積極的な参加を期待しています。前期・後期課程の在籍生・修了生には留学生も多く、また留学やフィールドワーク等、海外で研究を進めている日本人学生もいます。

【講座ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/tagen/gender/>

教員と専門領域・研究テーマ

松下千雅子 准教授

MATSUSHITA, Chikako 博士（文学）

担当科目：ジェンダーとセクシュアリティ ab

研究テーマ：アメリカ文学、クエア批評、批評理論

星野幸代 准教授

HOSHINO, Yukiyo 博士（文学）

担当科目：ジェンダーと文学 ab

研究テーマ：近現代中国語圏の文学・映画及び舞踊史

金相美 准教授

KIM, Sang-Mi 博士（社会情報学）

担当科目：メディア社会心理とジェンダー、オンライン・コミュニケーション論

研究テーマ：メディア・コミュニケーション、インターネット研究、メディアの社会心理

新井美佐子 准教授

ARAI, Misako 博士（経済学）

担当科目：ジェンダーと経済 ab

研究テーマ：フェミニスト経済学、社会政策におけるジェンダー

◎博士後期課程修了生の声

「大学の先生になってから……」

高 媛 (2013年3月修了)

スーツを身にまとい、大学院を修了したとたんには私は学生から大学教員に変身しました。現在、南京郵電大学日本語専攻で日本語教師として勤めています。

新米の教員として大変な点はたくさんあります。例えば、日本で長く生活して日本語を普通に使ってきたとしても、自分で話すことと学生に教えることとは全然違います。どうやって日本語を分かりやすく説明できるかは難しい問題です。そればかりではなく、大学側より授業の面白さまでも要求されるため、授業中に生徒の注意を引き付けようと、教材に使う ppt には、色からスタイルまで工夫を重ねています。

教員として勤めて僅か一ヶ月ですが、大学院での勉強と経験を既に生かしていると実感しています。特に、学部卒業生の論文指導というチャレンジにおいてです。母語による思考法と中国式論文の書き方に慣れてきた学生にとって、日本語で論文を書くのは非常に難しいことです。そのため、論文の構成や、注と参考文献の書き方を教えることから、言葉の用法をチェックすることまで、全部指導教員の仕事です。更に、剽窃がないか、学生の論文中の怪しい部分について一々調べなければなりません。こうした論文指導を経験し、私は今改めて、大学院での勉学に大変感謝の念を抱きつつ、博士論文を指導して下さった先生方に深い敬意を表したいと思います。

私の顔にはまだ幼さが抜けきらないらしく、キャンパス内でよく「四年生の先輩」だと誤解されることがあります。同僚から「先生らしく厳しい顔をしなさい」とアドバイスされましたが、見かけばかりでなく実質も「先生らしくなる」ための修行を続けていきます。

◎博士論文の紹介

「性を演じる—映画における異性装とジェンダー—

張小青 (2013年3月修了)

中華圏の映画における異性装と越境的なジェンダー表象を分析対象として、異性装表象の文化的・政治的・映像的な意味を論じました。研究のきっかけは、映画の表象研究において、女性／男性イメージを論じたものが多いことに比べ、異性装イメージはあまり研究対象にされていなかったからです。論文の執筆にあたって、何度も論を練り直したり、資料を調べたり、日本語を修正したりするのは大変でしたが、理論を読んで新しいアイデアが浮かんだとき、投稿論文の掲載が決まったとき、博士論文が仕上がった瞬間、言葉で表せないほどの喜びを感じました。このテーマを研究すればするほど、自分が思った以上に、新しいことを発見し、またより多くのことを学ぶことができました。特に、「普通」を疑うことの重要さは今でも仕事に活用しています。





【松下千雅子准教授】

松下研究室では、文学と映像に関するクィア・リーディングをしています。文学・映像テキストにおいて、ジェンダーやセクシュアリティがどのように描かれているか、アイデンティティがテキストのなかでどのように構築されていくか、そしてそれがどのように解釈されてきたかを、テキストを丹念に読み解くことによって検証しています。著書に『クィア物語論』(人文書院)、共著に『クィア批評』(世織書房)、*Hemingway and Africa* (Camden House) など。



【星野幸代准教授】

女性学／男性学／ジェンダー批評の基本を学びながら、文学・映画を対象にフェミニズム／ジェンダー批評の可能性を議論します。これまでの受講生の研究対象は、中国文学(丁玲、張愛玲、陸小曼、林徽因)、映画(楊徳昌、李安)、日中比較文学(胡適、樋口一葉、谷崎潤一郎、川端康成)、江戸時代の女訓、日台「イエ」制度、貞節牌坊など、「文学」という枠組みを自在に越えています。



【金相美准教授】

情報社会におけるデジタル・デバインド／知識ギャップ問題／政治コミュニケーション／ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)の生成などに関する理論的枠組み及び実証的方法論について学びます。ゼミ生の研究テーマには、Mobile Communication and Women's Empowerment、ネット活用が就職活動と社会関係資本に及ぼす影響、韓流と日韓関係、Media behavior and Gender Gap、留学生のSNS利用と異文化適応など多岐にわたっています。



【新井美佐子准教授】

私たちの日常生活・モノやサービスの生産や消費、売買(交換)には、ジェンダーの視点から見ると多くの問題が付随しています。院演習では、そうした経済事象に顕在・潜在するジェンダーを、理論と実証の両面から、国内外の諸文献の輪読等を通じて理解していきます。ジェンダー研究は、女性のための利益を追求するものではありません。誰もがより豊かな生活を送るにはどうしたらいいか?を念頭に、一緒に学んでいきましょう。

◎修了生の就職・進学先

イオンモール、南京郵電大学、アピ株式会社、河村産業、京都大学(事務職員)、トヨタ紡織、しまむらグループ、ヤマハ、三重大学社会連携研究センター、ピーアンドディーパートナーズ株式会社、花王、富士通、愛知県警、名古屋大学文学研究科(進学)、など。

メディアプロフェッショナルコース

Media Professional Studies

インターネットの拡大、情報技術の進展で、人類の情報活動が質的・量的に大きく変化しています。マス・メディアだけでなく、さまざまな企業・機関・組織でも、広報・宣伝・情報発信の専門家が必要になっています。ますます重要性が高まる「メディア」を担うプロを育てます。情報メディアに関する高度な知識と理論、情報の的確な評価、情報の創造・流通・交流に関するさまざまなコーディネート、効果的な情報コンテンツの制作と発信、情報学研究のフロンティア——そんな力を備えた人材のため育成を目指しています。

【コース ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/media/>

協力メディア企業と客員教授の紹介

中日新聞社：山田哲夫 客員教授

担当科目：新聞現場論、メディアプロフェッショナル技術演習（インターンシップ）

電通：川上久明 客員教授 他

担当科目：広告戦略論（基礎編）、（応用編）

NHK：小嶋富男 非常勤講師 他

担当科目：テレビ報道論

東海テレビ：春田亮介 非常勤講師 他

担当科目：民間放送論

『企業広報論』の協力企業

- 中部電力株式会社 ●東海旅客鉄道株式会社 ●ブラザー工業株式会社
- 株式会社ミツカングループ本社

◎時代をリードする

メディアのプロを育成

「メディア研究方法論」「ジャーナリズム論」「メディアと政治」「メディアの言説分析」「異文化コミュニケーション」などのカリキュラムを通じて、メディアに関する社会現象・文化現象を分析するための学識を養います。それを基に、メディアの現場や研究の場で活躍できる人材の育成をめざします。

◎メディア企業などが

バックアップ

社会連携をコースの方針に掲げ、中日新聞社、NHK、電通、東海テレビなどから多彩な講師陣を迎えています。また東海エリアを拠点とする日本有数の企業の協力を得て、広報・広告・宣伝論を理論面・実務の両面から学んでいきます。インターンシップのチャンスも充実しています。

◎学生の就職先

24年度修了者	アイシンAW株式会社 日本放送協会 株式会社トランス・コスモス 電通名鉄コミュニケーションズ ANAエアポート株式会社 株式会社エヌ・エヌ・エー イオンリテール株式会社 株式会社バンチャーバンク 一橋大学イノベーション研究センター
---------	---



河村雅隆

MASATAKA KAWAMURA

教授

人生幸せに生きる秘訣は、視野狭く自己評価高く生きることだろう。それと反対の生き方をしたい。

担当科目：現代放送メディア論 a・b、テレビ報道論、放送番組制作論

専門分野：A comparative History of Broadcasting, American and European Society seen from the Broadcasting

研究室：全学教育棟北館304号室

個人 HP：<http://kenpro.mynu.jp:8001/Profiles/0065/0006577/profile.html>



中村登志哉

TOSHIYA NAKAMURA

教授

学問は思考の方法・道具・訓練を提供し、諸君に明晰さをもたらしてくれる。ただし、待ち焦がれるだけでは何も実現しない (M.Weber)。

担当科目：ジャーナリズム論・メディアと政治

専門分野：Political Science, International Relations

研究室：全学教育棟北館306号室

個人 HP：<http://nakamuratoshiya.com/>



エドワード・ヘイグ

EDWARD HAIG

教授

マスメディアが社会の力関係から受ける影響、またマスメディアがそれに与える影響そしてこの力関係がメディア テキストで具現化される様相と一緒に考察しましょう。

担当科目：メディア英語、メディアディスコース分析論

専門分野：Critical Discourse Analysis, Media Discourse

研究室：全学教育棟北館203号室

個人 HP：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~haig/>



小川明子

AKIKO OGAWA

准教授

メディア研究に踏み込むことは、日常生活のすべてのことがらが研究対象化することを意味します。ともに苦しみ、そして楽しみましょう!

担当科目：メディア研究概論 メディア研究方法論

専門分野：Media Studies, Media Education, Digital Storytelling

研究室：全学教育棟北棟303号室

プロジェクトHP：<http://mediaconte.net/>



後藤明史

AKIFUMI GOTO

准教授

(情報基盤センター)

ICT (情報コミュニケーション技術) を活用し、新しいメディアを自分の力にしましょう。

担当科目：メディアコンテンツ制作論 a・b

専門分野：Educational Technology, Lesson Study

研究室：全学教育棟北館201号室

個人 HP：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~goto/>

@GotoAkifumi (twitter)

GotoAkifumi (facebook)

英語高度専門職業人コース

English Professionals Training Course

英語高度専門職業人コースでは、異文化に精通し、英語に堪能であり、かつ、国際的視野に立って地域に貢献する人材を養成することを目指しています。授業科目には、英語圏の文化や歴史を学ぶ科目、英語教育および第二言語習得関連科目、翻訳・通訳の実技演習、英語母語話者による「英語表現演習」などがあり、学生の目的に応じた多様なカリキュラムを構築することができます。新卒の学生に加え、社会人リカレント教育の一環として、在職のまま就学する社会人や中等教育機関の英語教員も積極的に受け入れています。

【授業科目】(一部のみ)

- 国際多元文化特殊講義 I~IV ●国際多元文化演習 ●eラーニング技術演習
- 言語科学演習 ●翻訳技術演習 I~II ●通訳技術演習 ●英語表現演習 I~V

【コース ホームページ】

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/kosenjin/>

教員と専門領域・研究テーマ

尾関修治 教授

英語教育/コンピュータとネットを利用した教育法の開発

長畑明利 教授

アメリカ文学・文化/20世紀アメリカ詩/多文化社会の表象

村主幸一 教授

シェイクスピア/西洋演劇/パフォーマンス研究

松岡光治 教授

19世紀イギリス文学/ヴィクトリア朝文化史/翻訳技術論

上原早苗 教授

19世紀イギリス文学/ヴィクトリア朝文化/出版・検閲制度

村尾玲美 准教授

第二言語習得論/音声言語認識メカニズムの解明

◎英語教員のリカレント教育

中等教育機関の英語教員を積極的に受け入れています。「大学を卒業してから8年間、公立高校の英語教員として働いていた私は、忙しいながらも充実した毎日にもかかわらず、何かが足りないような感覚にとらわれていました。そして昨年、それが何であるのかもよくわからないまま、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に飛び込んだのです。大学院生としてのこの一年間は、多くの新鮮な経験を積むことができました。」(修了生の言葉より)

◎さらなる研究に挑戦

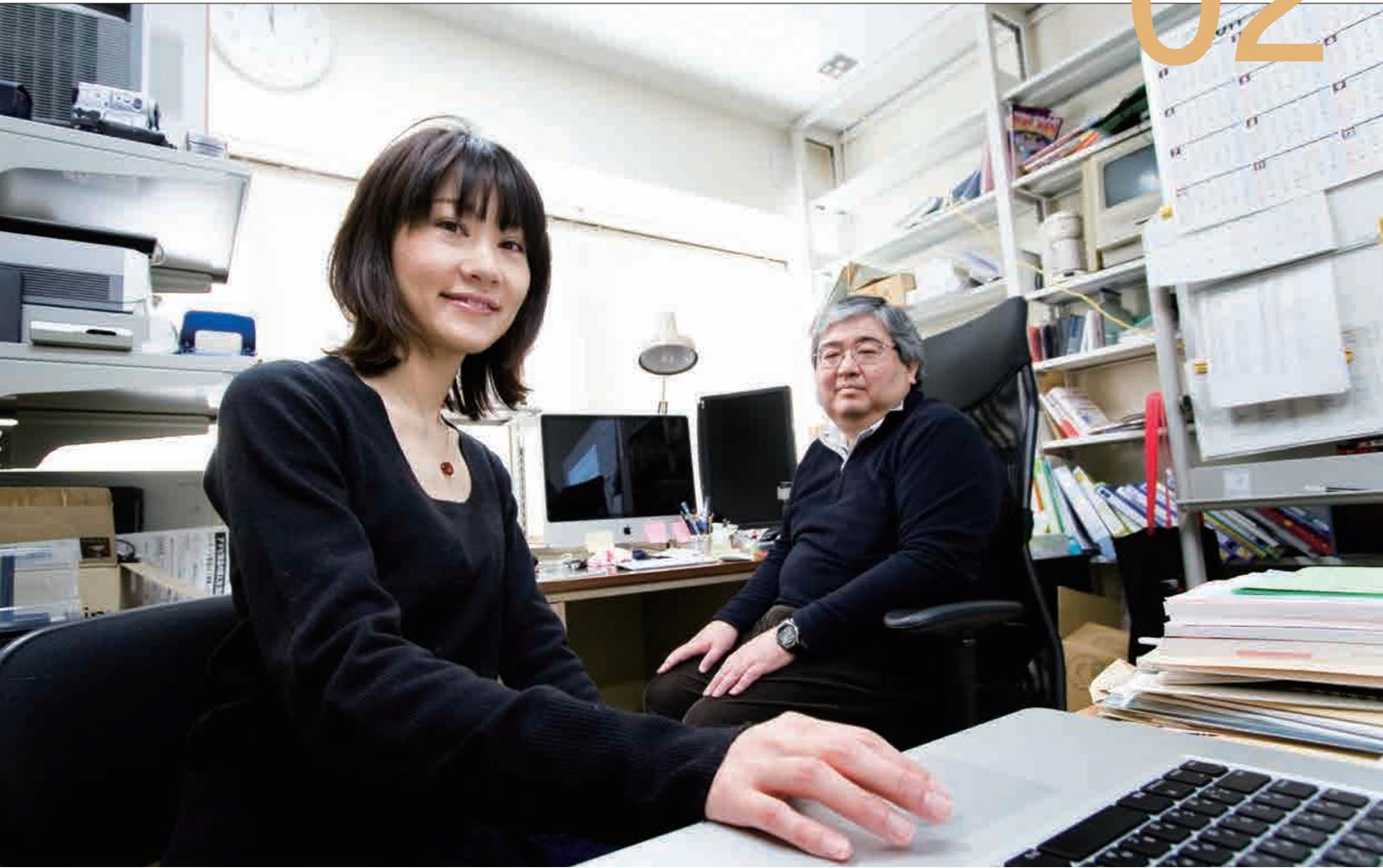
コース修了後さらに博士号取得を目指して本研究科や他研究科の博士後期課程に進学する学生もいます。「英語高専人コースの2年間は、一生のうちでも第2の青春とっていい程かけがえのない楽しい時間でした。素晴らしい先生方に実践的な英語運用力から幅広い専門知識まで学問の魅力を教えていただき、同期の仲間とは一緒に学会に出かけたり、情報交換しながら刺激しあうことができました。そのとき研究した第2言語習得分野から認知プロセスに興味をもち、さらに他研究科の博士後期課程への進学の道を選びました。博士号取得を目指してがんばっています」(修了生の言葉より)

◎授業紹介:翻訳・通訳技術演習

実際に翻訳や通訳の現場で活躍されている先生の授業が開講されています。「通訳技術演習」の授業では、通訳ブースを使っての実技演習も行います。

◎コース修了者の就職先の例

ミクニ、日本アイ・ビー・エム、クリーク・アンド・リバー社、大同メタル工業、中日新聞、豊川高校、津島北高校、杏和高校、名古屋大学附属中学・高校、豊田工業高校、東邦高校、愛知産業大学、中部大学(非常勤講師を含む)



尾関修治 教授 村尾玲美 准教授

尾関／名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。東海学園女子短期大学、福井大学教育学部、中部大学国際関係学部を経て2009年より現職。研究テーマは英語教育でのeラーニングと学習管理システム。

村尾／名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程修了。早稲田大学オープン教育センター助教を経て2010年より現職。専門分野は第二言語習得論で、主な研究テーマは音声言語認識メカニズムの解明。



名古屋大学では学生の英語教育にeラーニングを活用しています。英語高度専門職業人コースでは、eラーニング教材の作成やネットワークを利用した教授法などについても実習することができます。

尾関：ではとりあえず守備範囲をひとことで。僕はコンピュータとネットを利用した英語教育の手法とか教材を開発してます。

村尾：私は第二言語習得に関わる諸要因の因果関係について実証的研究を行っています。尾関先生は趣味と研究が一致しているようですね。

尾関：うーん、いつもコンピュータいじってますからねえ。ハードウェア触るのも好きだし。研究って、他の人の成果に積み上げるという面もありますけど、やっぱり細かいところや一見関係ないところから自分でやってみるといこともよくあるでしょう？そういう意味では趣味と通じますよね。村尾さんはどうなんですか？

村尾：私は子供のころからバイオリンを習っているんですけど、楽器が弾けるようになる過程と言葉を習得する過程って似てると思うんです。バイオリンを練習することが研究のヒントになることも多いですよ。

尾関：趣味がアイデアの源ですか。まじめですねえ。僕はとりあえず面白そうだと思うと自分でいじり出しちゃう方で。料理も一緒。食べさせてもらうより自分で作る方が好き。大学院で勉強するっていうのは、いわば座って出されたものを食べるというよりは、自分で作る側に回るとってことでしょうか？

村尾：音楽なら、聴く側から演奏する側に回るわけですよ。

尾関：どちらにしてもおいしいと思ってもらうこと、いい演奏だと思ってもらうことが目標になるし、少なくともそのことを意識することが大切。

村尾：それが楽しめる人は研究も楽しめるんですよ。

The Graduate Program in Comparative Studies of Language and Culture (G30)

比較言語文化コース

The Graduate Program in Comparative Studies of Language and Culture is an interdisciplinary, English-taught program designed to prepare students interested in Japan for comparative research in linguistics or cultural studies. Our program of study allows students to tailor their curricula according to their individual research interests, via a range of courses in linguistics, media studies, literature, visual culture, and cultural history.

Courses

●Linguistic Typology and the Japanese Language ●Japanese Psycholinguistics
●Introduction to Sociolinguistics I, II ●Second Language Acquisition ●Second Language Development ●Cultural and Intellectual History of Japan I, II ●Word and Image in Japanese Narrative I, II ●A Comparative Approach to Media Discourse I, II ●Topics in Geography and Culture I, II ●Analyzing Cultures I, II ●The Comparative History of Tuberculosis ●Literary Modernism and the Avant-Garde ●World Animation ●The Philosophical Background of Modern Japan ●Critical Theory ●A Comparative History of Broadcasting

Webpage

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/G30/clc/>

Faculty and research areas

Kaoru HORIE Professor

Linguistic typology/contrastive linguistics/cognitive linguistics

Liang Chua Morita Associate Professor

English education in Japan/sociolinguistics

Katsuo TAMAOKA Professor

Psycholinguistics

Shunji INAGAKI Associate Professor

Second language acquisition

Remi MURAO Associate Professor

Second language processing

Edward HAIG Professor

The language of ecology, the ecology of language/the ideological use of language in Japanese and English news media/the interrelations between public and private discourses of youth, crime and class

Dylan MCGEE Associate Professor

See the opposite page.

Mahito FUKUDA Professor

Comparative Culture/history of medicine/cultural history

Simon POTTER Professor

Cartography

Akitoshi NAGAHATA Professor

American literature and culture/modernism

Takashi WAKUI Professor

Modern Japanese literature/animation studies

Satoshi FUSE Associate Professor

Political theory

Chikako MATSUSHITA Associate Professor

Feminist theory/sexuality studies/literature and theory

Masataka KAWAMURA Professor

Study of media and media history

Mark WEEKS Associate Professor

Culture/literature/philosophy

◎ A student's research description

I chose Nagoya University's G30 program because it offered me an independent research environment with access to a wide range of literature. My research interests at Nagoya University concentrate on Japanese films of the postwar period. By also studying the postwar *Nihonjinron* discourse, I am trying to connect the depiction of Japaneseness with ideological and cultural transformations that occurred in postwar Japan.

– Georgy Buntilov (M1 student from Russia)





Dylan McGee

Associate Professor

Professor McGee has a Ph.D. in Comparative Literature (Japanese/Chinese) from Princeton University (2009), and conducted research for his dissertation at Kanazawa University (2004-2005). His principal field of research is Japanese literature of the Edo period (1603-1868), with a focus on the history of book publication, circulation and reception. In addition to several translations of early modern Japanese narrative fiction and poetry, he has also published articles in English and Japanese on the works of Ueda Akinari (1734-1809), Nagoya *gesaku* writers, the history of amateur *chaban kyōgen* performance, the development of clock-based narrative time in *kibyōshi* and *sharebon*, and reader inscriptions in early modern rental books (*kashihon*). His current project is a book-length study of the Daiso lending library, which operated in Nagoya (1767-1899) and boasted the largest inventory of any commercial book lender in early modern Japan.

As a teacher, it has been immensely rewarding to participate in the Graduate Program in Comparative Studies of Language and Culture, which is now entering its third year. The opportunity to exchange ideas with students from many different cultural and academic backgrounds has enriched my teaching in many ways, insofar as it has challenged me to reconsider familiar material from new perspectives and to develop new modules that are fresh, exciting, and relevant to the interests of students. In each class, I aim for an optimal balance of lecture and lively class discussion, both driven by an inquiry-based approach to learning. Students are encouraged to share their observations and insights during close examination of textual artifacts, to draw connections with other materials examined in the course, and ultimately to develop lines of inquiry that will lead to original research. Preparing students for independent research is my ultimate goal as a teacher. To that end, I invest a great deal of time designing and developing my graduate courses, and mentoring my graduate advisees through the process of researching and writing their master's theses. Now, with the first cohort preparing to defend their theses, it is really exciting to see the results.

修士論文題目・博士論文題目の一部

日本言語文化専攻

●日本言語文化学講座

★修士論文

- 日本における総角結びの独自性
- 中日における魯迅作品の教材利用に関する一考察
- 日本近代における愛玩犬の扱われ方
- 「違いがわかる」購買者から「違いを楽しむ」購買者へ—ネスカフェ・ゴールドブレンド TVCM における伝統の創出—
- 江戸時代後期における湯屋の考察—『賢愚談銭湯新話』と『洗湯手引草』を中心に—

★博士論文

- 日本統治下における台湾近代劇の生成と発展—植民地知識人の演劇活動の系譜を中心に—
- 在日朝鮮人文学における「朝鮮的なもの」—金石範の作品を中心に—
- 「武士道」と「植民地」からみた新渡戸稲造の思想研究
- 柳宗悦における「朝鮮」の位相—日本近代美術史の「周縁」をめぐって—
- 透谷・藤村文学とその時代—「男女交際」言説を中心に—

●比較日本文学学講座

★修士論文

- 福沢諭吉の「美学」の思想
- 中日における魯迅作品の教材利用に関する一考察
- 継子いじめ譚における父親の役割について—『落窪物語』を中心に—
- 欠落性のある女性を語る「僕」の語り—『ノルウェイの森』について—

★博士論文

- 修身教育の形成と近代的エトス—童話・寓話・昔話における〈子ども〉の役割—
- 中国清末民初期の修身教科書と日本
- 幕末・明治初期における「諫言」の変遷と終焉—下級武士の忠誠観を中心に—
- 『方丈記』における「閑居」の世界—〈仏〉〈隠〉融合の視点から—

●日本語教育学講座

★修士論文

- 日本語と中国語における移動表現の対照研究—移動動詞と使役移動動詞の語彙化パターンの異同をめぐって—
- 「えらい」と「立派」の意味分析
- 3言語間の語彙的表象の結合関係—中国人、韓国人、日本人の外来語処理—
- 中国語を母語とする日本語学習者のピッチアクセントの知覚に及ぼす諸要因
- 中国語を母語とする日本語学習者の自動詞と可能表現の選択について
- 韓国語・中国語母語話者による複合動詞「～出す」の習得—母語の影響を中心に—
- 中国語母語話者における日本語モダリティ表現の使用について—「はずだ」「わけだ」「にちがいない」を中心に—

★博士論文

- 音象徴語をめぐる普遍性と個別性
- 中国語を母語とする日本語学習者による漢字語の認知処理メカニズム
- 日本語のV-N型漢語動詞の語構成論的研究—離脱・帰着を表す動詞を中心に—

●応用言語学講座

★修士論文

- 不同意表明における理由の表し方—日本語母語話者とタイ語を母語とする日本語学習者との比較—
- 日本語動詞「見る」の研究—統語的側面を中心に—
- 語彙的複合動詞「見～」の習得に関する一考察—中国人日本語学習者を対象に—
- 中国朝鮮族と日本人の依頼表現の使用に関する対照言語学的研究—比較語用論(Cross-cultural Pragmatics)の観点から—
- 日本語の「もと」と中国語の「下」「旁」の空間的用法に関する対照研究
- フランス語の話し言葉における従属接続詞 parce que の機能的拡張—日本語の「カラ」との比較を通じて—
- 無標の因果複文の日中対照研究—テ形を用いる日本語の複文と“閩聯詞”(「接続表現」)を用いない中国語の複文を中心に—
- 中国人日本語学習者の値段交渉ストラテジー
- 現代日本語トロジー表現の研究

★博士論文

- 現代日本語における可能表現に関する研究—無意志自動詞を中心に—
- コーパスを利用した日本語談話標識「でも」「だから」の使用に関する研究
- 日本語の談話における視点の一貫性と言語理解・言語運用とのかかわり—台湾人日本語学習者を中心に—
- 日韓母語話者及び韓国人日本語学習者における「再勧誘」行動に関する語用論的研究

●現代日本語学講座

★修士論文

- 和歌山県東牟婁方言のアスペクト体系
- 温度形容詞の意味分析—「あつい」「つめたい」「あたたかい」「ぬるい」を中心に—
- 日本語の法律文における類義用語の意味分析—日常生活における意味との対照分析—
- 中国朝鮮族日本語学習者の促音挿入について
- 「忍耐」を表す動詞の意味分析
- 現代日本語における「異常」を表す形容詞の意味分析—「おかしい」を中心に—
- 香港広東語を母語とする日本語学習者の促音の脱落・挿入・混同について—中国語北方方言母語話者との比較を通して—

★博士論文

- 12ページのリストを参照のこと。

●日本語教育方法論講座

★修士論文

- ビジネス場面における電話会話終結部の分析—中国人日本語学習者のクレームへの対応を中心に—
- 日本語教師を目指す上級日本語学習者は日本語作文をどのように評価するのか
- 初対面の相手に対する自己開示の研究—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の初対面会話を中心に—
- 添加型接続詞「それで」「で」の指導に関する実験的研究—明示的な文法指導・インプット強化・インプット洪水の効果—
- ベトナム中等教育機関におけるノンネイティブ日本語教師のピループ構造

★博士論文

- CALL 教材における学習者要因の検討および CALL システム環境の提案
- 日本留学試験「記述問題」のトピックに関する研究
- コミュニケーション能力育成の視座からみた既存日本語教材と教師の意識に関する実証的研究—いわゆる禁止表現を例として—

国際多元文化専攻

●多元文化論講座

★修士論文

- 住まいが語る日本女性の生き方モデル
 - 『無言の山丘』における差別の連鎖と台湾人アイデンティティ
 - Japanese and American: Yoshiko Uchida's Double Identity in Her Works and Manuscripts
 - L'Antisemitisme et la liberte d'expression en France contemporaine
 - 越境する「福祉」—福祉をめぐる普遍主義と国民国家の対立を越えて
- #### ★博士論文
- 芹沢光治良文学にあらわれた信仰観の考察
 - チベット族における一妻多夫婚の形成理由に関する考察—中国雲南省迪慶族自治州徳欽県での現地調査に基づいて—
 - Communicative Silence in the Cybersociety of Japan

●先端文化論講座

★修士論文

- Determinants of the International Success of the Japanese Visual Artists
- Craft Language Transformed into Movement: Ballet's "Bodies which Internalize Language"
- ガバメント、ガバナンス、トランスナショナルリズム
- 統一後の旧東ドイツ人の文化アイデンティティをめぐる表象の変遷:映画『ゾンネンアレー』と『グッバイ、レーニン!』の分析を通じて
- 禪とイデオロギー
- 越境するファッション:ゴシック・ロリータをめぐる表象文化論的考察
- Die Krabatsage: Repräsentation eines guten Zauberers als volksidentitätsstiftende und die Fremdheit verkörpernde Gestalt
- 現代中国「ハレ」に見られる中国的要素:ハレ工「大紅灯笼高高掛」の作品構造とその受容

★博士論文

- 都市と言説:都市域におけるHIV感染対策への言説研究の応用
- When the Fourth Wall Broke Down: AIDS Plays and Their Messages against Homophobia
- How This World Works: Capitalism, Anime and the Global Audience
- 追悼する身体:現代日本社会における中絶の主体とフェミニズムの政治
- 20世紀後半のイギリスのニッチ・メディアとマイクロ・メディアにおける若者像:ロックンロール・ファン、モッズ、スキンヘッドに関する語言説的研究
- 再魔術化の文化研究:20世紀後半期における自己変容の技術と欲望
- エルネスト・ラクハウの政治思想:敵対性・不審者・デモクラシー

●アメリカ言語文化講座

★修士論文

- Examining the Effect of Task-Based Language Teaching on Implicit English Ability for High School Students in Japan
- Fathers and Sons: An Analysis of Bernard Malamud's *The Assistant* and Paul Auster's *Moon Palace*
- Vocabulary Size and Lexical Communication Strategies in Second Language Writing
- Jack Kerouac's Quest for Transcendence and Its Influence on Rock Music
- A Study of *The Sun Also Rises* and Its Reception in China
- The Critical Period Hypothesis and English Language Education in Japan
- An Analysis of Nancy Cunard's Route to an Anthology *Negro*

★博士論文

- Givers in Exile: Americanization, Gender, and Reciprocity in the Works of Anzia Yezierska
- 官約移民「後藤潤」像の変遷—ハワイ日系社会黎明期の記憶をめぐって—

●東アジア言語文化講座

★修士論文

- 中国語の受身文に関する研究—他動詞と自動詞という観点から
- 張承志論—「黒駿馬」と内モンゴルとの関わりについて—
- 中国語における“NP1+A+V+NP2”形式の成立条件とその構文的特徴について
- 現代中国語における“了”の用法について—中国語学習者を対象とする誤用分析の観点から—
- 現代漢語語気助詞の時体表达功能研究—以“的”“了”“呢”“来着”为中心—
- 莫言と大江健三郎の文学における救済
- 現代中国語における介詞“给”について—受身文と処置文への互換性を通じて
- 現代中国語の方向補語“起来”について
- 川端康成と沈從文における伝統への回帰—「古都」と「辺城」の比較を中心に—
- 日本語の名詞形構造傾向と韓国語の動詞形構造傾向
- 日本語母語話者のための韓国語教育

★博士論文

- 台湾新文学運動の初期的展開—1920年代植民地知識人青年の近代探索—
- 夢と詩を織り成す開拓者—『嘗試集』、『新体詩抄』を中心に—
- 儒学思想における貞節観と貞節牌坊
- 王安憶の都市小説—上海へのトポフィア—
- 京劇の韻白に関する音響音声学的研究
- 張愛玲の文明観の〈変容〉についての考察—外国人作家の作品との関係を中心として—
- 劉心武の小説の語りにおける個人と社会—ラベルとイメージ的作用
- 日本統治期における韓紙の変容—朝鮮総督府の製紙改良事業を中心に—
- 創られる「民族」：現代中国における民族政策とマイノリティ集団の変容—四川・雲南両省ルグナ地域ナズ人集団を例に—
- 現代中国語の指示表現に関する研究—“這／那”の用法を中心に—

- 現代韓国語の強意表現
- 京劇の韻白に関する音響音声学的研究

●ヨーロッパ言語文化講座

★修士論文

- フランスにおける教育と「機会の平等」—パリ政治学院特別選抜制度の事例を通して—
- Der Einfluss von Bildung und Assimilation auf die Töchter der Familie Mendelssohn
- カップルの非婚化に見る現代フランス
- A Study of Musical Elements in the Play *Pygmalion* and the Musical Film *My Fair Lady*
- Heinrich Vogelers Werke 1906 bis 1914: Die Idee der Rückkehr zur Natur
- Die Stadt Berlin im Werk Erich Kästners—Über die fiktive Wirklichkeit im Roman “Fabian”
- Die andere Seite des Historikers Gerhard Ritter und die Freiburger Kreise: Warum hat er an der Widerstandsbewegung gegen das Dritte Reich teilgenommen?
- On the Limitations of the Illyrian Movement
- Die hierarchische Struktur in der national-sozialistischen Fremdarbeiterpolitik
- 共和国原理と地域語—バスク・イカシラの自主教育からみえるもの
- Style in *Oliver Twist* by Charles Dickens

★博士論文

- 女性とミッション—1780～1860年の英国における宗教的使命感と女性の役割
- ディケンズの想像力にみる増殖と繁殖
- クロアチアにおけるマリア信仰とクロアチア民族主義
- 上海におけるメディアと近代性(1926～1939)—共同体、日常生活、ナショナリズム—
- ディケンズの歴史観—『バーナビー・ラッジ』、『二都物語』、『子供のための英国史』研究
- 国家社会主義ドイツにおける「社会的」租税政策としての所得税制
- ノヴァーリスの幻創論

●ジェンダー論講座

★修士論文

- Representation of sexual minorities in Japanese television dramas: Violence, forced coming-out and elimination of desire
- 日本統治下における台湾人女性の変容—イエ制度と近代化の二重構造
- 芥川龍之介の小説に見られる中国人娼婦像—ポストコロニアリズムとジェンダーの視点から
- 林徽因に関する一考察
- 陸小曼のジェンダー観について
- 魯迅と胡適の結婚観—母親に対する「孝」を中心に—
- 李安の『ラスト・コーション』における視線のポリテクス
- 1930-40年代中国の新型旗袍(チーパオ)に対する女子学生の受容—女子教育、ライフスタイルを中心に—
- 近世の女訓に関する考察
- わが国の母親向け育児雑誌における「父親」—1970～2000年代の変遷
- 『ブローックバック・マウンテン』の映画分析

★博士論文

- セクシュアリティから見る丁玲文学における周縁性—知識人・レズビアン・性的被害者の女性たちをめぐって—

- 性を演じる—映画における異性装とジェンダー

●メディアプロフェッショナルコース

★修士論文

- アラブ地域に見るパブリック・ディプロマシーの研究
- 中国におけるメディア・リテラシー教育の内容に関する研究
- 電子新聞の現状と可能性
- 放送における「多様性」の追求
- 対日観形成に果たす日本性番組視聴経験と影響に関する考察
- パッシングを巡る新聞・週刊誌報道の分析
- 中朝新聞報道をめぐるニュースフレーム比較分析
- The Role of Public Service Broadcaster in National Disaster Management
- 朝日新聞と沖縄タイムズによる沖縄少女暴行事件の報道について
- 2011年名古屋市長選挙に関するニュース番組の内容分析
- 地域活性化をねらいとする文化事業と一般市民との関係構築を促すドキュメンタリー映像の制作(コンテンツ)
- TVコマーシャルに表象される国民文化の日中比較
- 名古屋大学デジタル・インタラクティブ・マップの作成(コンテンツ)
- 在日コリアンは韓国ドラマをどう見ているか
- CEPA影響下における香港映画の越境および「香港性」の変容に関する研究
- 中国人留学生の異文化的王とSNS利用行動に関する研究
- 松本サリン事件の新聞報道にみる犯罪報道

★博士論文

- 政治コミュニケーションの視座による中国共産党機関紙研究—中国共産党全国代表大会報道の比較分析を中心に—
- 公正原則と公共の利益—アメリカ放送メディアの考察を通じて—

●英語高度専門職業人コース

★修士論文

- The Acquisition of Inflectional Morphemes by Japanese Learners of English in EFL Settings
- The Effects of Educational Intervention on the Motivational Development of Japanese EFL students
- The Effect of Rapid Listening with Transcript Reading Tasks on Improving Listening Proficiency of Japanese EFL Learners
- The Allegorical Imagery of Clothes and Behaviors in *The Chronicles of Narnia*
- Integrating Focus on Form in Teaching Plans for English for Engineers
- Effects of Word Imageability and English Proficiency on the Process of L2 Translation
- Narrative Devices in *The Mayor of Casterbridge*
- Designing Materials for Japanese University Students: Women's Literature in the EFL Classroom
- The Development of the Hmong Community in Minnesota: The Resettlement Experience of the Host Community and the Refugees



名古屋大学大学院 国際言語文化研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B4-5 (700)

☎052-789-4881 (教務課)

文系総合館1階(地下鉄名城線名古屋大学駅1番出口より徒歩3分)

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/>